

中国上海における恋愛と結婚

徐 安 琪 著

東 美晴・角田 幹夫・張 一 梅 訳

はじめに

上海は長江デルタの東端、中国南北方向の海岸線の中心に位置する。この地理的環境によって、19世紀中葉の開港以降、西洋列強が中国大陸の資源を略奪するための基地となった。しかし、これによって導入された資本主義商品経済、工業文明および、その価値観は経済発展を促す潜在力となり、急速に解放以前の中国における最も近代的な大都市へと変貌を遂げた。中華人民共和国建国以降には、経済、社会、文化のバランスの取れた発展により、中国における工業、経済、科学技術、貿易、金融、文化のひとつの中心となった。さらに、1990年代に入り、浦東開発政策が施行される。これによって、上海は改革開放の最前線へと躍り出た。今日の上海は長江流域地区の経済発展の旗手であり、国際的にも経済、金融、貿易のひとつの中心地として、現代的、開放的な世界都市に変貌しつつある。

上海はいち早く資本主義的生産方式を導入するとともに、いち早く西洋資産階級の人権、平等博愛、自由などの思想や男女平等主義の薫陶を受けた。租界の開設によって、上海の人々は西洋的なライフスタイルの中にあるレディファーストの姿勢や民主的開放的な夫婦関係を目の当たりにすることとなった。少なからぬ人々が驚き、のちには模倣、賛同するようになった。

上海のメディアは中国において最も早く西洋の新しい価値観を導入し、自由恋愛による婚姻、女性解放等の議論を展開した。また、最も早くソヴィエトの女性が教育、就職、参政、婚姻において男性と平等の権利を獲得したというニュースを伝えた。さらに、女兒の間引き、纏足、未成年結婚（トンヤンシー）、売買婚などの陋習を批判し、新しい文化、思想を広め、多くの市民に自己意識を目覚めさせてきた¹⁾。

以上のような上海における近代化、国際化は、人々の意識解放の下地となったのである。本稿では、このような背景のもとにあった上海の人々の恋愛と結婚について、「転換期の中国社会における婚姻の質に関する調査」の結果をもとに述べていく²⁾。

1. 恋愛の自由－機会と制約

1920年代、30年代から、上海では既に自由恋愛が提唱され始め、紹介者は従来の媒酌人から親戚や友人、隣人へと移り変わっていった。たとえば、上海における住宅の配置は密集した構造になっているため、同じ横町（里弄）の住人同士は頻繁に行き来しあう。そこで、幼い時から一緒に遊んだ幼なじみの男女が好意を持ち合い、夫婦となる「隣近所の恋（隔壁恋）」が増加した。また、女性の就学・就職機会が増すにつれ、同窓生や元同僚が夫婦となる「同窓の恋（同窓恋）」も増加した。こうして、1950年代には、自由恋愛が既にひとつの風潮となり、親が取り決める婚姻（包弁婚）は徐々に姿を消していった³⁾。

しかし、上海には他地域に率先して自由恋愛の風潮が生まれたにもかかわらず、「配偶者選択時に、多くの機会があった」と答えた人は20%にも達していなかった。家庭、社会、政治、経済等の環境が依然として当事者たちの配偶者選択に潜在的な制約を与えているのである。

現状では、上海の人々の配偶者選択には、機会と制約が共に存在し、主に以下の特徴があると言える。

(1) 友人ネットワークによる配偶者探し

男女の配偶者探しは何らかの社会的ネットワークが必要である。かつての伝統的な社会では、配偶者探しは主として親類ネットワークに依存していた。また、他に利用されていたのは地域ネットワークであった。

近代都市上海では、女性の進学・就職が増えるに従い、男女が社会的付き合い合う場が拡大した。ここ十年の間に、自分たちで知り合った夫婦の割合が既に53.1%まで達した。

自分たち同士で知り合うケースにおいて、親戚・隣人関係から夫婦関係に発展したものは1967年以前の36.5%から1987年以後の9.5%にまで激減している。かわりに、同窓生、同僚、友人関係から発展したケースが増加している。

見合い結婚のケースでは、かつての家族・親類による紹介から、同窓生、同僚、友人による紹介への変化が顕著である。若者の配偶者探しの社会的ネットワークは、職業関係、交友関係への依存度が高まってきたのである（表1-1）。

表1-1 夫婦が知り合った経路（結婚年代別）

単位：%

| 知りあった経路 | 結婚年代 | | | |
|--------------|-------|-----------|-----------|-----------|
| | ～1966 | 1967～1976 | 1977～1986 | 1987～1996 |
| 自分たちで知り合った | 31.3 | 41.8 | 43.6 | 53.1 |
| 同窓、同僚、友人の紹介 | 19.4 | 26.6 | 31.9 | 29.5 |
| 隣近所の紹介 | 10.0 | 8.2 | 10.9 | 3.9 |
| 家族の紹介 | 26.4 | 21.7 | 13.3 | 12.7 |
| 媒酌人の紹介 | 1.0 | 1.1 | 0.0 | 0.4 |
| 結婚紹介所、恋人募集広告 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.4 |
| その他の紹介 | 1.0 | 0.0 | 0.4 | 0.0 |
| 親が取り決めた | 10.9 | 0.5 | 0.0 | 0.0 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回答数 | 201人 | 184人 | 690人 | 495人 |

この結果は同時に以下のことも示している。

すなわち、偶然の出会いで婚姻に至るケースは3.2%とごくわずかであった。1980年代以来、結婚紹介所や恋人募集広告を掲載した新聞などが次々に出現しているが、成功率は極めて低いことを示している。調査対象となった800組の回答者のうち、結婚相手募集の広告を介して婚姻に至ったケースはわずか2組であった。

多くの上海の人々にとって、現実には偶然のロマンティックな出会いは少なく、配偶者探しは学校や勤務先など、日常生活の社会的ネットワークに頼らなければならないのである。

(2) 親に相談したり許可を得たりすることも多い

上海では、旧来のように婚姻を完全に親に取り決める（父母之命、媒酌之命）ことはほとんどなくなった。しかし、親が子どもの配偶者選択について聞きも問いもしなかったケースは決して多くない。回答者の70.5%が「親の許可を得た上で結婚を決めた」と答えており、「本人が主として決定し、親はまったく関わっていない」としたのは23.1%であった。

表1-2 結婚の決定における主体性（婚姻年代、性別別）

単位：%

| 項 目 | 分 類 | | | | 性 別 | |
|----------------------------------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 結 婚 年 代 | | | | 男 | 女 |
| | ～66 | 67～76 | 77～86 | 87～96 | | |
| 上の世代の意志（婚前に配偶者を知らなかった、あるいは不満だった） | 5.5 | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 0.4 | 1.1 |
| 上の世代の意志（満足している） | 18.4 | 2.7 | 3.0 | 2.2 | 4.5 | 4.9 |
| 本人の意志（親は満足している） | 48.8 | 64.1 | 68.6 | 66.9 | 63.9 | 66.0 |
| 本人の意志（親は干渉しなかった） | 20.4 | 26.1 | 21.9 | 24.6 | 27.0 | 19.3 |
| 本人の意志（親は不満または反対した） | 3.0 | 4.4 | 5.3 | 5.8 | 2.2 | 7.9 |
| 本人の意志（親はいなかった） | 4.0 | 2.7 | 1.0 | 0.4 | 1.9 | 0.9 |
| 合 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回 答 数 | 201人 | 184人 | 690人 | 495人 | 770人 | 495人 |

表1-2に示すように、婚姻年代が遅くなるに従い、上の世代の意志での婚姻は減る。だが、本人の意志とはいえ親が不満や反対を示したケースが僅かながら増えている。これは男性よりも女性に多く、親の意志に反して好きな相手と結婚に至ったのは女性により多いことがわかる。また、子どもの恋愛相手に対し、親が「不満を表明し、分かれるように言った」、「強く反対した、あるいは本当に別れさせようとした」をあわせると9.8%にも達している。80年代、90年代の親の間では、子どもの恋愛を熱心に援助することも、荒っぽく干渉することも、50年代、60年代から明らかに減少したとは言えない（表1-3）。

表1-3 本人の配偶者選択に対する親の影響（複数回答）

単位：%

| 親の影響（親の働き） | 結婚年代 | | | | 性別 | |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ～66 | 67～76 | 77～86 | 87～96 | 男 | 女 |
| 人に頼むか自分で配偶者を紹介したことがある | 21.1 | 19.8 | 15.6 | 11.3 | 15.8 | 15.0 |
| 熱心に仲立ちをし、成功させようとしたことがある | 15.3 | 11.9 | 13.9 | 15.4 | 15.6 | 13.0 |
| 不満を表明し、分かれるように言ったことがある | 2.6 | 6.2 | 6.1 | 6.9 | 2.8 | 9.0 |
| 強く反対し、別れさせようとしたことがある | 1.6 | 2.8 | 4.8 | 3.6 | 3.3 | 4.3 |
| 関心があるが、干渉はしない | 31.1 | 37.3 | 40.0 | 48.6 | 42.8 | 39.9 |
| 一切口出ししない | 30.5 | 25.4 | 25.4 | 17.8 | 24.5 | 22.8 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回答数 | 201人 | 184人 | 690人 | 495人 | 770人 | 495人 |

子どもの配偶者選択に対する親の干渉や、親による決定が無くならない原因は、世代間の断ち切りがたい相互依存関係のためである。上海では現在でも三分の一の家庭が三世同居であり、多くの既婚の子どもたちは住宅や子育ての面において親の援助を必要としている。一方、親の側では、日常生活において仲良くやっつけられるか、老後の世話をしてくれるかが関心事である。親にとっては、よそから来た若者の気性、考え方やライフスタイルが伝統からかけ離れすぎていて親子間の世代ギャップが更に深められるのではないだろうか、あるいは恋愛に熱中するあまり一時的に衝動的で軽率な選択をしてしまったり、世渡りの経験が浅いために騙されたりするのではないかなど、心配は絶えないのである。

一人っ子が増えるにつれ、親の期待も不安も増えていく。子どもの配偶者選択への親の影響もなくならないであろう。

しかし、全体では、子どもの配偶者選択に対する親の役割は、仲を取り持つこと、知恵を貸すこと、経験を伝えることが主流であり、消極的な干渉より積極的な援助が多い。また、当事者の多くは自由恋愛を前提に、親の意見を尊重し、親の許可を得た上で、最終的な選択をしている。

(3) 青年の自己選択機会の増加

上海は近代的、開放的な都市であるにもかかわらず、1980年代までの長い間、社交ネ

ネットワークが発達せず、個人の私生活に対するイデオロギーの統制も強く、男女の深い付き合いは結婚を前提にした場合しか許されなかった。「三角恋愛」、「多角恋愛」はしばしば不道徳な行為だと見なされ、複数の恋愛経験を持つことも、「朝三暮四」や移り気だと指さされがちであった。仕事、革命こそ最優先すべきことであり、恋愛、結婚は小事であり私事であるという社会的通念が強く、早熟な恋愛も一目惚れもメディアの批判の的となった。その上、当時の経済的条件による制約のために、カラオケ、ダンスホール、遊技場など出会いの場となる公共の場所も少なく、自由な選択の機会は実質上大きく制限されていた。調査結果では、回答者の平均恋愛回数は1.51回であった。回答者の三分の二が初恋の相手と結婚しており、1回目の恋愛の成功率は64.9%である。2回以上の恋愛経験を持つ人はわずか10.8%しかいない。

2回以上の恋愛経験を持つ538組の回答者によれば、初恋が失敗した原因は、性格の不一致、相手の気が変わった、相手が病没したと回答した60%を除くと、家庭的、社会的、政治的要因も相当の割合を占めていた。その内訳は、経済、住宅等の物質的条件のため(11.7%)、親の反対による(13%)、双方が遠隔地に離れ離れに住んだため(7.6%)、片方が海外へ渡航したため(1.1%)、政治的身分が障害になったため(2.4%)であった。以上の結果から、初恋が失敗に終わった原因には、明らかに時代的な要素や性別による違いが反映されていることがわかる。特に、文化大革命時代には政治的な原因で別れたカップルが8.7%にも達している。また、この時期には多くの若者が郷里を離れ、農村や辺境で農業労働に従事した。このため、戸籍制度の障碍を乗り越えられずに結婚できなかった若者も多い。実際、遠隔地に離ればなれに住んでいたために初恋の相手と別れたという比率が最も高く、13%に達していた。一方、この時期には、親の反対が原因で別れた比率が一番低くなっていた。理由として、「造反有理」の時代であったため、親の権威が失われ父母の子どもの結婚に対する干渉が自然に減少したことが想定できる。この他に、内乱の時期を反映した物質的欠乏、住宅建設費用の欠乏など、経済、住居が原因で別れた若者も増えており、特に1970年代末から1980年代初頭にかけては14.5%と、最も高くなっていた。この十年では、性格の不一致、片方の気が変わった、が初恋に失敗した主な原因となっている。これは恋愛時の自由選択の機会が増加したことを示している。

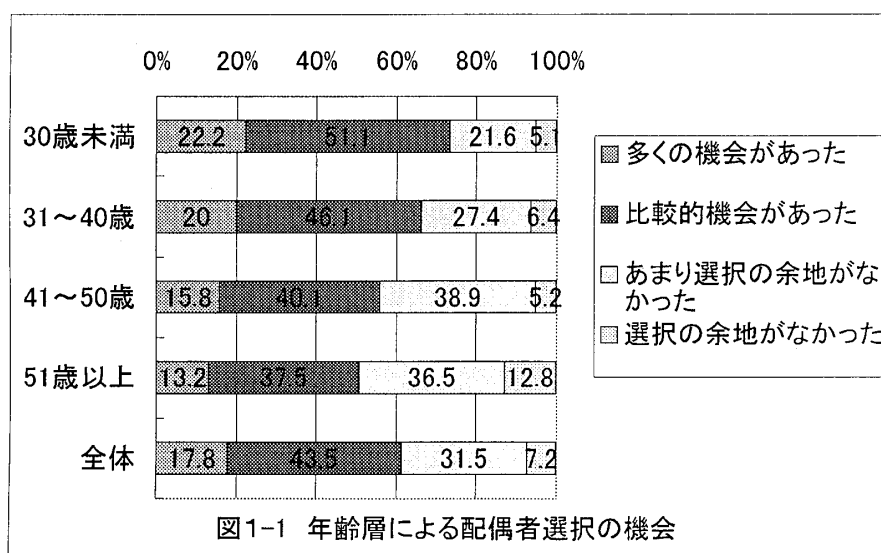
性別の違いからは、男性は経済事情、住宅事情、政治的要因、女性の側の海外渡航などをより多く挙げており、女性はより多く親の干渉をあげている(表1-4)。

表1-4 回答者の初恋の失敗原因

単位：%

| 初恋失敗の主な原因 | 結婚年代 | | | | 性別 | |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ～66 | 67～76 | 77～86 | 87～96 | 男 | 女 |
| 経済・住宅事情など | 8.6 | 11.6 | 14.5 | 9.4 | 14.1 | 9.1 |
| 両親の反対 | 11.4 | 2.9 | 18.1 | 11.3 | 9.2 | 17.1 |
| 離れて住んでいる | 5.7 | 13.0 | 9.0 | 4.7 | 8.1 | 7.1 |
| 気が合わない | 62.9 | 55.1 | 52.5 | 68.1 | 57.0 | 62.6 |
| 政治的原因 | 5.7 | 8.7 | 1.4 | 0.9 | 3.9 | 0.8 |
| 相手が海外に行った | 0.0 | 2.9 | 0.5 | 1.4 | 2.1 | 0.0 |
| その他 | 5.7 | 5.8 | 4.1 | 4.2 | 5.6 | 3.2 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回答数 | 201人 | 184人 | 690人 | 495人 | 770人 | 495人 |

時代が移り変わるにつれ、配偶者選択の自由を束縛してきた社会的・政治的要因が減少していく。市場経済が社会流動を促し、人々が行き来する空間を広げていく。消費水準の向上、余暇の増加、文化生活の多様化も異性が自由に知り合い、自ら配偶者を選択し合う機会を増大させた。調査結果では、31才以下の青年男女では、2回以上の恋愛経験を持つ人が42.9%にも達し（50才以上の男女では26.1%）、自分にはより多くの配偶者選択チャンスがあると答えた人も明らかに増えている（図1-1参照）。



2. 理想のパートナーイメージ

誰を自分と運命をともにする一生のパートナーとして選ぶかは、決して軽い、純粋に個人の自由に属する話題ではない。なぜなら、中国式の婚姻は今なお共白髪まで添い遂げるをこと尊ぶだけでなく、「家庭本位」を重視する。配偶者選択は当事者の一生の幸せを決定するだけでなく、一族の存続と隆盛にも関わる。夫婦の不仲や離婚は、当事者とその家族の名誉に影響するだけでなく、社会的に不安定な要素とも見なされる。このため、配偶者選択においては、当事者にも家族にも社会的な責任や心理的プレッシャーが重くのしかかり、人々を慎重にさせる。

また同時に、配偶者選択の基準は、家庭の価値、時代の風潮等と関連し合っているため、社会、文化の変遷のパロメータとも見ることができる。例えば、「(配偶者を選ぶのに) 50年代なら模範労働者を、文革時代なら労働者や農民を、70年代なら海・陸・空を、80年代なら老九を」^{原注(1)} という俗諺が流行したこともあった。

では、実際に上海人の配偶者選択にどのような基準があったのだろうか。心中の理想の伴侶イメージに、実際に時代の差が表れるのだろうか。回答者の配偶者選択の基準を全面的に把握するため、我々は5つの大分類別に30項目の選択肢を設けた(それぞれの大分類ごとに重要度が高い2項目を選び、合計10項目を選択)。

大分類の結果は次の通りであった。一番多く挙げられたのは「人柄や性格」、その次は「生理的条件(年齢、健康、スタイル、容貌、生育能力、血縁関係などを含む)、最も少なかったのは「物質的条件」(62%の回答者は物質的条件を考えなかったという)であった。次に具体的な基準では、上位五項目は以下の通りであった。：①真面目で頼りになること(55.9%) ②健康であること(54.5%) ③性格があう(44.8%) ④優しくて思いやりがあること(36.2%) ⑤住宅を持っていること(23.6%)。これらに対し、相手に「海外に親族を持つこと」、「財産・貯蓄を持つこと」や「親を養う負担がないこと」を求めた人はいずれも4%未満であった。

表2-1 男女の配偶者選択の主な基準(複数回答)

| | 配偶者選択基準ランキング | | | | |
|----|--------------|-----------|-------------|-------------|-------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 男 | 健康である | 真面目で頼りになる | 優しくて思いやりがある | 性格があう | 容貌 |
| 女 | 真面目で頼りになる | 健康である | 性格があう | 住宅 | 優しくて思いやりがある |
| 全体 | 真面目で頼りになる | 健康である | 性格があう | 優しくて思いやりがある | 住宅 |

半数以上の男女が「真面目で頼りになること」と「健康であること」を理想の主要条件として挙げており、人々の婚姻に対する基本的な要求は安定や、継続性であると理解できる。「真面目で頼りになること」は温厚で誠実を意味すると同時に、一途で責任感があるという伝統的な美徳にもつながる。「健康であること」は家庭における義務を分担し、後代につないでいく基本的条件である。ゆえに、この二点の選択は理に適っている。

しかし、「職業」や「収入」など通常配偶者選択の基準だとみなされるものがランキング上位に入らなかった（いずれも20%未満）。原因は、1980年代まで長期に渡り、「金銭主義」や「物質利益」の追求が悪の根源だと批判されていたこと、計画経済の時代には職業は組織的に決められ個人の選択の自由がなかったこと、収入も平均主義の「大鍋飯」の下にあったことがあげられる（かつて上海で流行した「36元万歳」のスローガンはまさに当初の分配制度に対する揶揄と諦めであった）。当時の人々は結婚相手の職業、収入に過大な要求をしなかったのも当然のことであろう。

また、異性のスタイルや容姿に要望を持つことも、かつては外見を重視し内面を軽んじる低俗な選択眼であるとみなされていた。そのため、多くの人々が「容貌を取る人」「動機不純」等のレッテルを張られることを恐れ、意識的にも無意識的にも、個人の自然な好みや正常な要求を抑圧してきた。回答者中、相手の「容貌」に関心を寄せたのはわずか19.6%、「スタイル」もわずか11%であった。

極端に左翼的な思想が隆盛であった特殊な年代における配偶者選択行為の政治化、婚姻関係の階級化も、中国の婚姻文化の一つの歴史的姿である。当時は、配偶者として、当然、共産党員、共青团員、幹部、軍人、重要機関の人員、内定された「後継者」、エリートなど、出身背景がよく、過去の経歴が潔白な人を選んだだろう。また、両親や社会関係に「汚点」がある者は、生きるためあるいは自分の境遇を改善するために、政治的身分が確かであるプロレタリア階級の庇護を求めただろう。出身家庭、社会関係、本人の政治成分が複雑な人達は、決して「真面目で頼りになる」と見なされることはなく、当然、結婚相手やその家族に不安や恥をもたらししかないと考えられてきただろう。そのため、当時の人々にとって、政治的な条件は上位にランクされるべき重要な基準だったのである。

表 2-2 結婚年代別に見た男女の配偶者選択の主な基準（複数回答）

| | | 配偶者選択基準ランキング | | | | |
|-------|---|-----------------|-------|-----------------|-----------------|-----------------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| ～66 | 男 | 真面目で 頼りになる | 健康である | 優しくて思い やりがある | 性格があう | 政治的身分 |
| | 女 | 真面目で頼り になる | 健康である | 政治的身分 | 性格があう | 家庭の出自 |
| 67～76 | 男 | 真面目で 頼りになる | 健康である | 性格があう | 優しくて思い やりがある | 政治的身分 |
| | 女 | 真面目で 頼りになる | 健康である | 性格があう | 政治的身分 | 住宅 |
| 77～86 | 男 | 真面目で 頼りになる | 健康である | 性格があう | 優しくて思い やりがある | 容貌 |
| | 女 | 真面目で 頼りになる | 健康である | 性格があう | 住宅 | 優しくて思い やりがある |
| 87～96 | 男 | 優しくて思い やりがある | 健康である | 性格や質 | 真面目で 頼りになる | 容貌 |
| | 女 | 性格や質 | 健康である | 真面目で 頼りになる | 住宅 | 職業 |

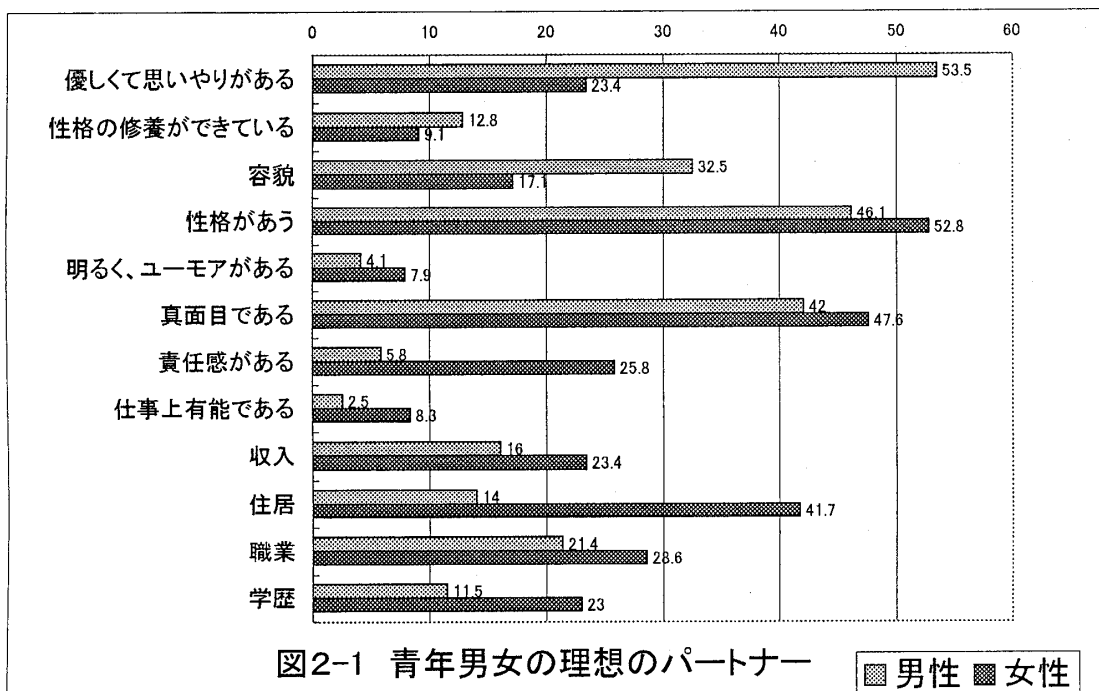
階級闘争時代の終焉に伴い、青年男女の配偶者選択における政治的要素の影響は昔話になった。そのかわり、金銭面、物質面の要素が再び婚姻にとって必要不可欠な基礎だと見なされ、異性の美貌、雰囲気引き付けられることも単なる動物的本能だと批判されることもなくなった。調査の結果から、政治成分、家庭背景、真面目で頼りになる、健康である、思想観念などの条件が年代の推移に伴って著しく減少し、学歴、職業、収入、住宅、スタイル、容貌、性格があう、趣味があう、聡明で能力がある、忍耐深く寛容である、大人の責任感がある、明るくユーモアがある等の項目が増加したことが見て取れる。

また、性別の集計結果から、男性は相手に対し、美しい容貌や優しい心遣いをより求める一方、女性は学歴、職業、住宅、収入、仕事の実績など社会的・経済的条件ばかりでなく、真面目で頼りになる、大人の責任感がある、明るくてユーモアがあるなど、人柄や個性に対しても期待を寄せている。この男女差は、ここ十数年に結婚した青年男女の間に特に顕著である。

男性が相手の容姿、気性、性格など自然資源をより重視し、女性が相手の成熟度、信頼度、経済力、潜在的能力など社会的資源をより重視する現象をどう評価すればいいか

ろうか。

実際問題として、配偶者選択時に「外見がすべて」、「拝金主義」など極端に走る例はないわけではない。だが、一般的に見れば、若者が持つ理想的なパートナーイメージの変化は、配偶者選択の社会的方向転換を反映していると考えられるだろう。以前のように、政治的規則、個人の道徳および、双方が共有している志を重視することを、いわゆる高尚で純潔なプロレタリア階級の配偶者選択基準だと祭り上げ、相手の外見、容姿、物質的基礎を基準に据えることをいわゆる低俗なブルジョアジーの配偶者選択基準だと貶めることは、偏っている上に、人間性にも反したものであった。実際、配偶者選択には、生理的、心理的、社会条件的要素を含む様々な基準が存在しており、それぞれの基準は婚姻に対する当事者の多様な要求を反映しているとともに彼らの人間性に基づいた自由な選択でもある。個々人は異なる経験、経歴、自身の状況、価値観、境遇などによって、婚姻に求めるものや相手に期待することが異なっていて当然である。配偶者選択の条件にそれぞれ偏りがあっても過度に非難すべきことでもない。



調査の結果はさらに以下のことも示していた。

家庭の出自、本人の成分など政治的条件や思想観念、収入などに関する要求は当事者の教育レベルと関係なかった。これらを除いた基準のほとんどにおいて、教育レベルの高い回答者ほど認める傾向が高かった。唯一、「真面目で頼りになる」という基準だけは教育レベルが低いほど支持が高かった。例えば、小学校または小学校以下の教育レベルの人と、短大または短大以上の教育レベルを持つ人とを比較すると、「性格や気があ

う」を選択した人の割合はそれぞれ25.5%と52.6%であり、「素質や素養がいい」は2.8%と18.8%、「聡明で能力がある」は9.2%と27.7%、「健康である」は43.4%と62%、「優しく思いやりがある」は21.7%と46.6%であった。つまり、教育レベルの高い人が配偶者選択時に、より多方面の条件を考慮している。彼らは理想的なパートナーへの期待が高い、あるいはより理知的でうるさい傾向があると言える。

3. 上海カップルのロマンティック

上海は中国と西側の文化が入り交じった近代的、開放的な都市である。そのため、上海の若者は天性ロマンチストであると思われがちだが、彼らの恋愛の過程は美しいというほどではない。実際、中国の歴史と現実の中に育った上海の恋愛文化が、西洋的でロマンティックなものとなるにはまだまだ距離がある。

ここでまず次の結果を示したい。：1570名の回答者中、自分の恋愛が「とてもロマンティックだった」と思う人はわずか1.3%、「比較的ロマンティックだった」と思う人もわずか11.8%であった。また、「あまりロマンティックではない」、「全くロマンティックではない」と答えた女性は28.5%、男性は22.6%であった。若い世代は上の世代に比べると、明らかにロマンティックに愛を語るようになった。例えば、30才以下では、「とてもロマンティック」、「比較的ロマンティック」だったと回答した人は26.3%に達していた。これに対し、50才以上の回答者ではわずか3.3%であった。「あまりロマンティックではない」、「ちっともロマンティックではない」では、30歳以下の18.2%に対して、50歳以上は48.0%に達していた。教育レベルが比較的高い回答者は、恋愛中のロマンティックな雰囲気作りに長けており、ロマンティックな感情を体験したとする者もより多かった。

回答者のロマンティックラブに対する理解と体験を深く把握するため、調査では「詩や絵画の中にいるような気分や雰囲気」、「恋愛経験がドラマティック」「心が乱れるほど愛し、いつもいっしょにいる」など8項目の具体的な選択肢を設けた。

結果では、上海の既婚男女の43.4%は「ロマンティックラブ」とは何かをうまく言い表せなかった。恋愛中、「惚れた目にはあばたもえくぼ」のようなロマンティックな気分さえ体験したことがない人が76.8%にも達した。もちろん、中高年では若かった当初からもロマンティックな要素が欠如していた。また、ロマンティックラブとは何かをうまく言い表せない、ロマンティックな気分を体験したこともない人には男性よりも女性にやや多かった。(表3-1、表3-2参照)

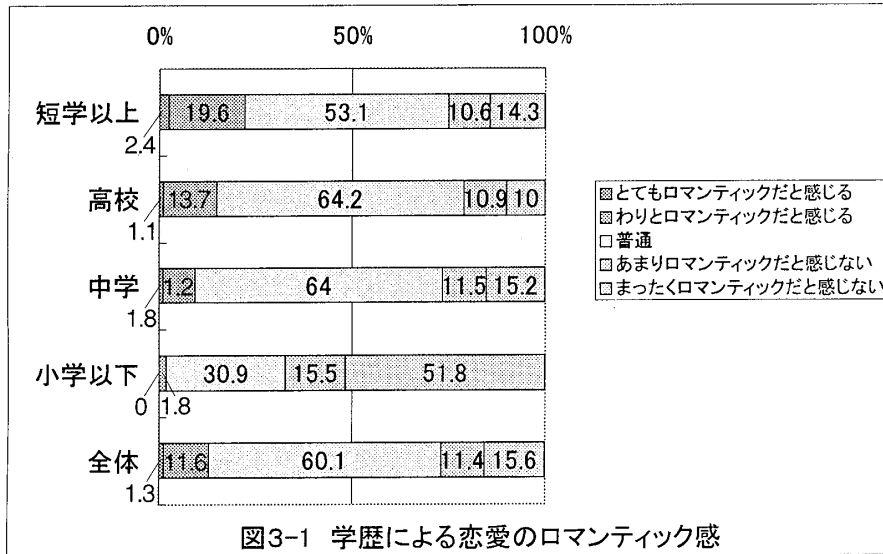
表3-1 年齢別に見た回答者のロマンティック・ラブの認識と体験

単位：%

| 恋愛中、ロマンティック・ラブに対する認識と体験 | 結婚年代 | | | | |
|-------------------------|------|-------|-------|-------|------|
| | ～66 | 67～76 | 77～86 | 87～96 | 全 体 |
| ロマンティック・ラブの特徴を一つも言い表せない | 72.6 | 47.8 | 44.5 | 28.5 | 43.4 |
| ロマンティック・ラブの体験は一切なかった | 90.0 | 77.2 | 80.3 | 66.5 | 76.8 |

表3-2 恋愛中の男女のロマンティック・ラブの認識と体験の差異（複数回答）

| ロマンティック・ラブの特徴 | 自分の理解や認識 | | 実際に体験した | |
|----------------------|----------|-------|---------|-------|
| | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 |
| 永遠の愛を誓うこと | 12.4 | 13.4 | 3.3 | 4.7 |
| 詩歌や絵画の中にいるような気分、雰囲気 | 15.8 | 16.9 | 2.9 | 4.4 |
| 恋愛経験がドラマティックでミステリアス | 7.1 | 8.1 | 2.9 | 3.0 |
| ほれた目にはあばたもえくぼ | 17.6 | 16.0 | 5.6 | 5.2 |
| 時々愛する人に意外な喜びをプレゼントする | 9.0 | 7.8 | 4.3 | 3.8 |
| 心が乱れるほど愛し、いつもいっしょにいる | 5.4 | 4.0 | 6.9 | 7.3 |
| 精神と肉体の完全な結び合い | 6.4 | 9.9 | 1.1 | 2.7 |
| 愛のために喜んで犠牲にする | 11.0 | 13.1 | 3.5 | 4.7 |
| その他 | 0.3 | 0.2 | 0.1 | 0.1 |
| うまく言い表せない又は体験したことがない | 46.1 | 40.6 | 78.4 | 75.2 |
| 合 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回 答 数 | 800人 | 770人 | 800人 | 770人 |



未婚カップルが恋愛中にあまりロマンティックさや情熱的であることを求めなかった原因として、以下のことが考えられる。

(1) デートの機能・方法の単一化

西洋ではデートといえば、社交、娯楽、パートナー探し、心の交流など様々な機能があり、異性とのデートも恋人に限らず、より広い交際範囲、より多様な交際動機を有しているものである。

ところで、デートの文化が中国に導入されて以来、異性間の単独でのデートはしばしば配偶者選択のためのプロセスとなっている。特に極左的思想がまかり通っていた時代では、恋愛の価値は貶められ、異性間で公然とデートすることや熱烈な恋愛もしばしば非難された。結婚とは革命に比べると取るに足らない小事にすぎないとされてきたためであり、デートは極秘に行われ、次第にその頻度も減らされていった。また、当時は娯楽施設が少なく、消費水準も低かったため、多くのカップルのデート方法は非常に単純なものであった。

調査結果では、恋愛中もっともよく行った交際パターンは「相手の家でおしゃべりする」「公園や大通りで話をしながらぶらぶらする」であった。(表3-3参照)

表3-3 年齢別回答者の交際パターン

単位：%

| 恋愛中の交際パターン | 年 齢 層 | | | | |
|--------------------------|-------|-------|-------|------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | 全体 |
| 映画、演芸、スポーツを鑑賞する | 36.6 | 34.0 | 22.7 | 17.2 | 28.2 |
| 公園や大通りで話をしながらぶらぶらする | 42.3 | 36.2 | 26.2 | 13.6 | 29.9 |
| カラオケ、ダンスホールなど娯楽や遊びの場所に行く | 2.9 | 1.2 | 0.0 | 1.0 | 1.0 |
| 喫茶店、レストラン、屋台で飲食をする | 12.6 | 7.3 | 3.7 | 3.0 | 6.1 |
| 相手の家でおしゃべりする | 43.4 | 38.8 | 34.3 | 21.2 | 34.8 |
| 郊外やよその場所へ旅行に行く | 4.0 | 3.5 | 2.5 | 2.3 | 3.1 |
| 一緒に友達の集まりに参加する | 11.4 | 7.4 | 4.4 | 2.3 | 6.1 |
| ラブレターを書く（多く書いた側の統計） | 5.7 | 3.1 | 4.4 | 9.6 | 5.0 |
| 隠れた場所でデートする | 1.7 | 3.1 | 3.0 | 1.3 | 2.5 |

上海では居住空間が狭いため、デートの場所を屋内から外に移したカップルも少なくない。いつの間にか、公園の芝生や静かな隅っこで、人目も憚らず抱擁しあっている男女や、自分たちの世界に入り込み他が目に入らない上海バンドにひしめく無数のカップルが上海的恋愛文化の象徴的な景観となっていた。想像すれば分かることだが、政治的、道徳的な二重の圧力と、プライベート空間が全く保障されていない状況の中で、ロマンティックな雰囲気や情熱が生まれるだろうか。

昨今、文化、娯楽施設が相次いでオープンされ、居住条件もだんだんと改善されている。従って、青年男女のデートの機能や方法も多様化しつつある。社会的な干渉の減少、物質生活レベルの向上、余暇の増加などで、ロマンティックな精神生活を求めることも可能になったといえるであろう。調査結果も、若い夫婦の恋愛期間には、交際方法がより多角的で豊富になっていたことを示していた。

(2) 理想的な感情表現の方法

中国文化では、理知的で、穏やかな含蓄のある異性間付き合いの方がより推奨され、ハリウッド映画にあるロマンティックでしみじみとしたストーリーも長い間批判され、上映禁止の対象となってきた。当時は、「ロマン」と「色事」は同義であり、「色事」は「下品なこと」であった。「一目惚れ」は理知が欠如した軽率で衝動的な恋愛とされ、「愛を誓い合うこと」も人を騙すための口車だと警戒された。まして「心が乱れるほど愛し、いつもいっしょにいる」などは、正に仕事や革命をおさなりにした小市民趣味の象徴だと非難された。その上、中国人の婚姻には伴侶を得るという特徴が顕著であるため、配偶者選択時に、真面目で頼りになる、責任感があるなどの点が重視される。それ

ゆえ、若い男女の恋愛にも、理知的で慎重で深い、現実的な傾向がより強く表出し、燃えるように屈託のない、ロマンティックな傾向はもともと欠如していた。

実際、調査の結果からは以下のことが明らかになった。上海における「一目惚れ」式のラブストーリーの発生率はわずか15%であった。初回のデートの後、ほとんどの男女はぜひぜひ「好感を持つ」、「印象は普通」という程度の感想を持ち、その後のコミュニケーションを通して徐々に感情が暖められる、いわゆる「日がたてば情が移る」タイプであった。そのため、当然、火花を散らすように激しく燃え上がる恋愛は少ない。

表3-4 婚前にどの程度相手を好きだと感じていたか（年齢別）

単位：%

| 婚前にどの程度相手を好きだと感じていたか | 年 齢 層 | | | | |
|------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | 全体 |
| 愛の極限に達して自己コントロールできなくなる | 3.5 | 2.2 | 1.0 | 0.3 | 1.7 |
| 幸せで楽しい、お互いに愛している | 49.1 | 32.6 | 26.6 | 21.5 | 30.7 |
| 仲がよくて、お互いに好感を持っている | 45.1 | 63.2 | 70.6 | 68.7 | 64.2 |
| 仕方がなく、無理に一緒になっている | 2.3 | 1.7 | 1.7 | 2.7 | 2.0 |
| お互いのことを知らないので何とも言えない | 0.0 | 0.1 | 0.0 | 6.7 | 1.3 |
| 合 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回 答 数 | 173人 | 686人 | 403人 | 299人 | 1561人 |

表3-5 婚前にどの程度相手を好きだと感じていたか（教育レベル別）

単位：%

| 婚前にどの程度相手を好きだと感じていたか | 学 歴 | | | | |
|------------------------|------------|-------|-------|------------|-------|
| | 小 卒 以 上 | 中 卒 | 高 卒 | 短大卒 以 上 | 全 体 |
| 愛の極限に達して自己コントロールできなくなる | 1.9 | 1.3 | 2.0 | 1.7 | 1.7 |
| 幸せで楽しい、お互いに愛している | 16.0 | 24.9 | 33.3 | 46.6 | 30.7 |
| 仲がよくて、お互いに好感を持っている | 62.3 | 71.4 | 62.7 | 50.5 | 64.2 |
| 仕方がなく、無理に一緒になっている | 4.7 | 2.1 | 1.5 | 1.7 | 2.0 |
| お互いのことを知らないので何とも言えない | 15.1 | 0.3 | 0.5 | 0.0 | 1.3 |
| 合 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回 答 数 | 106人 | 623人 | 600人 | 232人 | 1561人 |

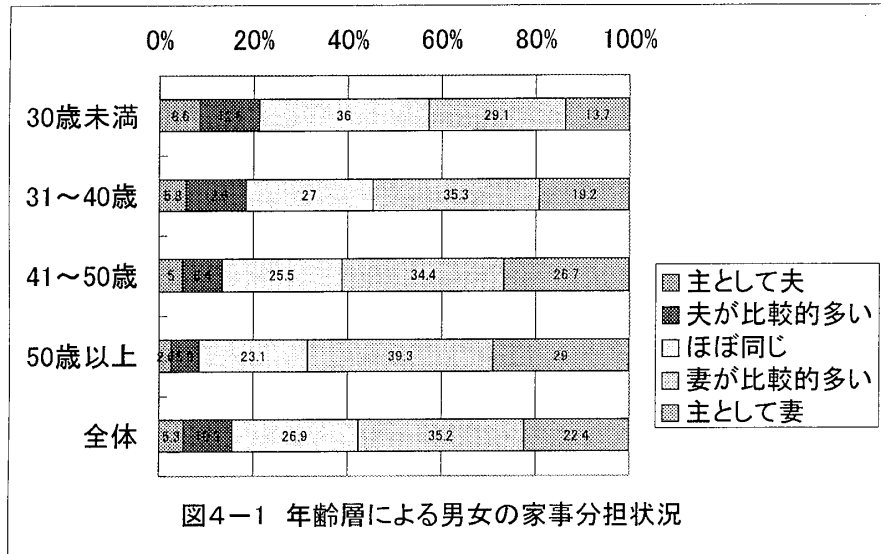
4. 上海男性－エプロン夫それとも恐妻家

「上海の夫」は賛否両論的である。「エプロン」「女性に負けている」「意気地なし」などと北方の男性に軽蔑される一方、「優しい心の持ち主」「遠見を持っている」「責任感がある」などの評判も取り、中国全土の女性ばかりでなく日本の女性にも配偶者の候補者として人気があった。

数年前に上海で流行ったテレビ番組『上海夫のいろんな顔』は、「台所にいる夫」「板挟みになった夫」「へそくりをためる夫」などのイメージを上海男性に定着させた。特に、「妻が怒鳴ると夫が震える。給料もボーナスもすべて上納し、残りものを全部引き受ける。きつい仕事も汚い仕事も一人でやる。殴られても叱られても口答えしない」というテーマソングは実に上海男子の哀歌となっていた。オーバーに、ユーモアたっぷりに表現された芸術作品にうるさく文句を付けるわけにはいかない。だが、習慣的な単なる観察、推測、想像を「調査結果」に昇格させて報道する文章（例えば、「90%の家庭では妻が日常的な支配権を持っている。80%の家庭では夫が料理や洗濯などの家事を請け負っている。」或いは「70%の夫はへそくりをためている。」など）は、奇抜なことを書くことで目立ちたいと考える一部の記者や偽学者の創作物だとしかいいようがない。

それでは、上海男性が家庭でどんな役割を演じているのだろうか。これには上海の妻の採点が一番権威的であろう。また、上海男性には、「エプロンをかける人」、「板挟みになった人」、「へそくりをためる人」がどれぐらいいるのか。これには、上海の夫たちの自己認識が一番信憑性が高いであろう。ここでは、我々は調査結果を通して、いくつかの大衆の偏見と誤解を招いてきた報道を正す。

まず、上海女性が家庭における自分たちの平等な地位を高く評価している（7点を満点とし、平均6.03点、他の方面での満足度に関する自己採点中の最高点である）にも関わらず、また上海の若い夫たちの生活能力が高くなり、エプロン姿で台所に立つことが増えたにも関わらず、「どちらがより多くの家事を担当しているのか」という質問に対して、「夫がほとんどを」という回答はたった6.3%、「夫が比較的多くを」という回答は10.3%、「半分半分」が26.9%であった。一方、「妻が比較的多くを」「妻がほとんどを」という回答は57.6%に達していた。調査結果と、かの「80%の家庭では夫が家事を担当する」説との違いは明らかであった。ただし、若い夫が台所に立つ傾向は明らかに増えている。



かつて数回に渡って行われた調査の結果も、今回の我々の研究と同じ傾向を示している。ただ、こういった社会学の研究成果は世間を騒がせることがなかっただけである。ここでその文献資料の一部を引用する。ここから、先行の調査結果と今回の調査結果がどれほど近いかが分かる。

例えば、1987年、2000人の上海市民に時間の分配について調査が行われた。一週間のうちの家事に使われた労働時間は、女性27.65時間で男性（14.96時間）の2倍であった。1990年、1960人の男女を対象にした調査では、上海市内に住む夫のうち、「自分がほとんどの家事を担当している」「自分がより多くの家事を担当している」と答えた人は僅か12.2%であった。1993年、798組の上海市内に住む夫婦に対する質問においても、家事に関して「夫がほとんどを」あるいは「夫がより多くを」とした回答は男性13.1%、女性12.2%であり、「半分半分」とした回答は男性21.7%、女性22.0%であった^{原注(2)}。

1996年、若い男性の家事参加が増えた、と本調査の結果をまとめた。実際、その数年前に何度か行った訪問調査の結果と比べて、夫の台所進出は確かに進んでいた。すなわち、上海の家庭においては両性間の平等意識が既に内面化されおり、男性の家事参加は自覚的な行動になっていた。だが、エプロンをかけて台所に立つのは依然として妻がメインであった。

それでは、上海の「エプロン夫」の数は他の地区と比べて多いのだろうか。この項目の結果を地区比較で見えていくと、上海の夫は華南、西北の農村男性や東北の男性と比べると疑いなくより多く家事を担当している。しかし中国の他の大都市と比較すると、確かに上海男性の「主夫」役割は首位にランクされてはいるが、数値の上では大きな差がなかった。たとえば、1993年、中国社会科学院社会学研究所が全国7都市で行った調査では、家事に関して「夫が主」と「夫がより多く」と答えた男性は、上海で13.1%、成都で12.4%、南京で11.9%、北京で11.7%であった。また、上海以外のいずれの都市でも、

家事は夫婦共同で分担すると答えた割合は上海より高くなっていた。たとえば、上海の22.0%に対して、成都では33.8%、南京では25.8%、北京では26.0%、広州では26.7%であった^{原注(3)}。

つまり、エプロン夫は、上海は他の都市に比べとりわけ多いとは言えないのである。これは中国の都市部における夫婦共働きの就業パターンと、同一の労働に対しては同一の報酬を与えるという分配方式を基礎とする経済基盤や生活 방식に深く根ざしていると言える。都市部の女性は、男性と同じくラッシュの中を通勤し、賃金を得て家族を養い、同時に大部分の家事を担当している。当然、夫も同じように仕事と家事を両立する義務がある。しかし、今に至るまで、男性は社会においてより多くの主たる役割を担当してきた。つまり、職場において重い責任を担わされ、より多くの労力を割いてきた（調査結果では、夫の仕事がより忙しいと答えた妻は48.1%、自分の仕事がより忙しいと答えた妻は21.8%である）。このため、家庭の分野では妻ほど頻繁にエプロン姿で台所に立たないことも情理に適っている。

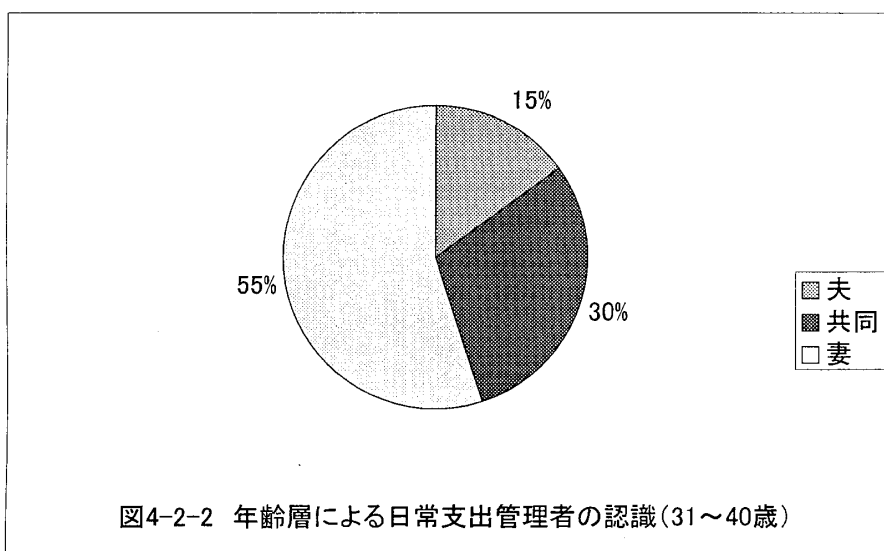
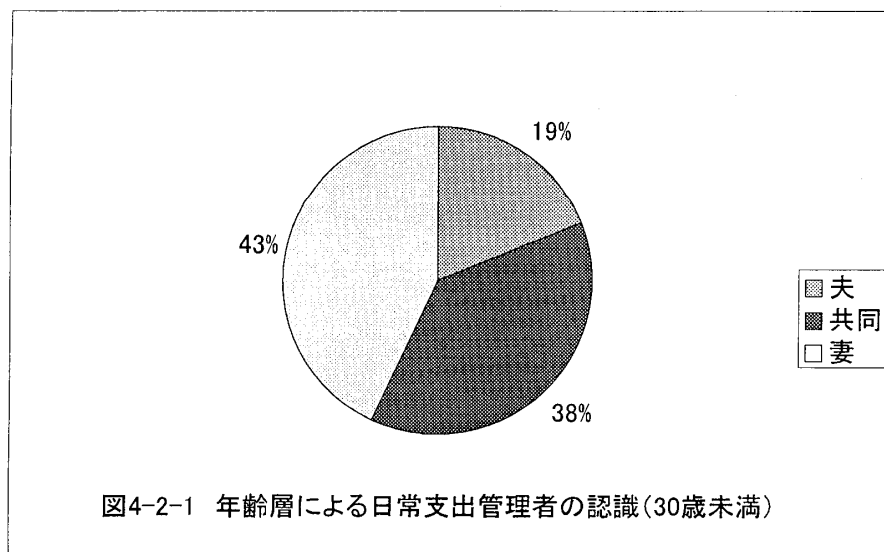
「上海家庭の80%は夫が家事を担当する」等の調査報告を作り出してきた人々、あるいは上海男性に「エプロン夫」という称号を与えた人々は、恐らく上海の一部の男性の「妻の下着を洗う」、子供の勉強の「お供をする」、仕事が終わったら「太刀魚をぶら下げて自転車帰宅する」、さらには平然とした顔で「痰壺やおまるを洗う」などの行動に驚き、困惑したのだろう。要するに、彼らが伝統的な家庭内分業を越え、堂々たる一家の主のイメージを壊したことに不快を感じたのであろう。これらの作者は恐らく女性の下着は依然として性や糞便と同じく不潔なものであり、下着やおまるを洗うような卑しい仕事は女のすべき仕事だというような潜在意識を持っており、現代の上海男性が子供の教育やショッピングなどを担当するばかりではなく、エプロン姿で下着をおまるを洗っても恥だと思わないのを見て、自然に「女性に負けている」「恐妻家」といった評価を与えたのであろう。

彼らが上海男性を「恐妻家」「意気地なし」とするもう一つの論拠は、いわゆる「上海家庭の90%は妻が日常の出費を管理支配している」ため、窮屈になった「70%の夫がへそくりをためる」ことである。しかし、我々の調査結果から、多くの家庭で妻が出費を管理しているが、上海家庭における主流は「民主的」であることがわかる。夫または夫婦共同で日常の出費を管理する家庭は全体の43.4%を占め、31才以下の若い夫婦の家庭では57.1%に上っている（図4-2-1～図4-2-4参照）。

経済権を握る夫が少ない原因は、夫が「恐妻家」だからではなく、日常的な買い物はほとんど妻が担当しているところにある。夫の個人消費を制限する女性は少なくはないが、主に喫煙、飲酒、賭博など有害消費に対する制限に限られている。また、経済権を握る女性が「公金を私消する」ケースは極めて少なく（メディアではよく自分の美しさを維持するために高級化粧品や衣類を購入する女性を大袈裟に描いているが）、逆に自

制し、節約する努力をおこなっている。

また、「妻より、自分の個人消費が多い」あるいは「妻とほぼ同じ」と答えた男性は83.1%に達し、「妻の個人消費のほうが多い」と答えたのはわずか16.9%であった。これは主に男性は喫煙、飲酒、付き合いなどで支出が多く、既婚女性の自分のための消費は安価なものに集中しているためである。化粧品やファッションに目がないのは、主に未婚女性であり、既婚女性ではない。同時に、調査結果から次の事実も明らかになった。すなわち、妻または妻と夫が共同で日常の支出をコントロールしている場合、妻の個人消費はより少なく、夫がコントロールしている場合に、妻の個人消費がより多くなっていった。男性の回答を表4-1にまとめて示しておく。



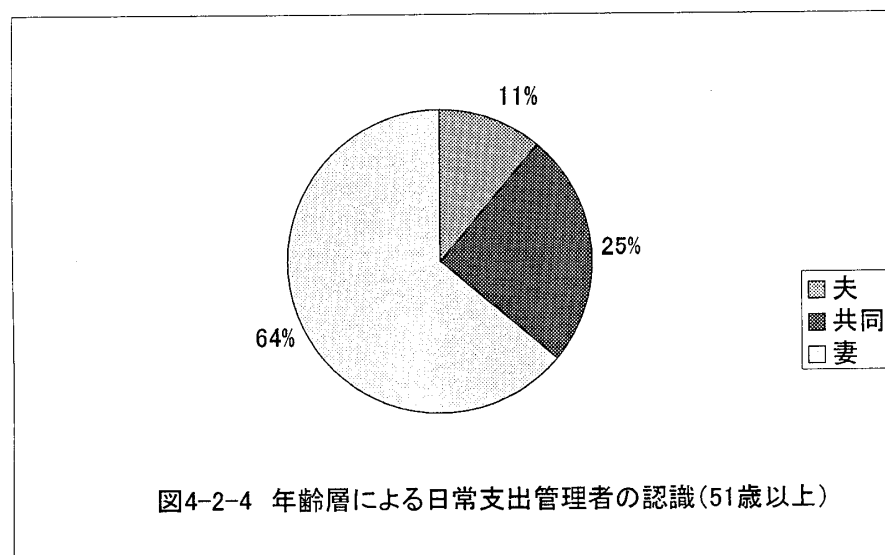
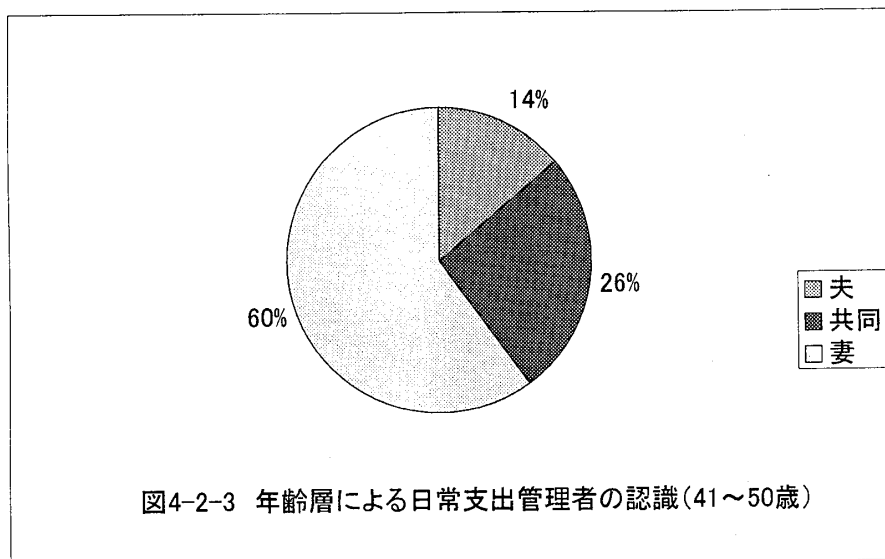


表4-1 経済管理方式別に見た家庭の個人消費（男性のみ回答から）

単位：%

| 個人消費 | 日常出費の管理権 | | | |
|---------|----------|-------|-------|-------|
| | 夫 | 共同 | 妻 | 全体 |
| 夫のほうが多い | 25.4 | 22.7 | 33.7 | 29.4 |
| 半分半分 | 44.1 | 67.1 | 49.8 | 53.8 |
| 妻のほうが多い | 30.5 | 10.2 | 16.5 | 16.9 |
| 合計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回答数 | 201人 | 184人 | 690人 | 495人 |

さらに、妻が日常の出費を管理する場合、夫の経済上の権利が侵害されるかどうかを調べた。結果は、妻が日常の出費を管理する家庭では、「いつも不自由を感じる」夫は僅か2.5%、「時々」と答えた夫は11.5%、「たまに」と答えた夫は10.8%、「全くない」と答えた夫は75.2%であった。つまり、妻による経済面の管理は民主的で物分かりがよく、夫の心理を傷つけることはほとんどないと言えよう。

また、へそくりをためているかという質問に対する回答においても、上海の「へそくり夫」はメディアを騒がせているほどではないことがわかった。プライバシーに関わる質問であるため、回答を差し控えた回答者もあるだろう。だが、もし本当に「70%の夫がへそくりをためている」なら、「へそくり」そのものを隠す必要性や、「へそくり」に敏感になることがもっと弱められる筈である。それゆえに、本調査において、回答者中「へそくり」を持っていると答えた夫が14.4%（妻は8%）であったことには信憑性があると言えるだろう。実際、多くの夫は矛盾を避けるため、あるいは緊急の出費に備えるために、「へそくり」を貯めていた。だが、妻達もあえて知らない振りをしている。男性達がしばしば自分の「へそくり金庫」を自慢したり、他人の「恐妻家」ぶりを皮肉ったりするのは、男性全体がかつてのような権威を失ったことに対する揶揄や反動であり、「妻に負けた」、「意気地ない」等とは関係がない。

なお、一部のメディアは、夫たちは社会的付き合いについて、いちいち妻に「朝は指示を仰ぎ、夜は結果を報告」、ちょっと油断すると「ベットの前で反省」をしなければならない、と誇張して描く。だが、現実には決してそんなことはない。異性との付き合いを例にあげると、「いつも」「時々」「たまに」婚外の異性と付き合う夫の割合は妻よりも高く、逆に異性と付き合わない夫の割合（27.3%）は妻（33.5%）より低い。異性の友達と会うのに妻の同意を得なければならない夫は僅か3.8%であり、妻よりも少ない。反対に、「配偶者の同意を得なくてもよい」という回答は妻よりも夫に多い。両性の態度に関しては、「夫婦それぞれ各自の活動時間や自由を持つべきであること」を否定した妻はわずか4.1%であり、夫の4.9%と大差がない。これほど物分かりのいい妻と同じ屋根の下で暮らす上海的夫は何をもって「女性に負けている」とできるのだろうか、何をもって「恐妻家」となるのだろうか。

その他に、上海男性の妻に対する高い満足度からも、彼らはけっして不当な仕打ちを受けてくよくよしているわけではないことがわかる。妻が「独断的」だと思ふ夫は僅か3.2%（逆に妻の場合は4.4%）、妻が「狭量的」だと思ふ夫は5.3%（逆に妻の場合は7.5%）、妻が「怒りっぽい」と思ふ夫は10.9%（逆に妻の場合は12.0%）、妻が喧嘩するとすぐ手を出すのに自分は手を出したことがないと訴える夫は8.1%（逆に妻の場合は13.9%）であった。同時に、婚姻を通して自分が得たもののほうが多いと思ふ夫は26.2%にも達しており（妻の場合は16.5%）、自分が与えたもののほうが多いと思ふ夫は11.0%（妻の場合は19.8%）であった。婚姻の幸福度に対する採点では、夫の平均は5.77点で、妻の5.65

点より高くなっていた。配偶者を「とても適任である」と「比較的に適任である」と評価した夫は81.7%に達し、妻の71.6%を上回っていた。総合的にみれば、男性は依然として婚姻によってより多く利益を受けている。彼らが婚姻を通して得たものは失ったものより遙かに多く、いわゆる「上海の夫は苦難を与えられ虐待され」というような報道は作り話でなければ、個別的な現象だとしかいえない。

5. 家庭の主役を演じる上海の妻

上海男性が「エプロン夫」や「恐妻家」として描かれるのと同時に、上海女性のイメージも歪曲され、損なわれている。典型的には、夫をあごで使う「河東獅子（やきもち焼きの女）」、つむじ曲がりの口うるさい年増女等のイメージで描かれてきた。家庭において平等な権利を享受しているという点では上海女性は世界でも屈指であるため、男性たちは時に「上海女性は解放され過ぎて、家庭での地位はとっくに半辺天を超えている！」と悲鳴を上げる⁴⁾。実際、この十数年の多くの研究結果において、上海女性が家庭において実権を握っている割合が夫の2倍近くとなっている^{原注(4)}。本調査の結果においても、家庭の権力モデルは女性に傾斜する傾向を示していた。妻が家庭の実権を握るという回答は26.9%、夫であるは13.7%、ほぼ同じぐらいであるは59.4%であった（表5-1参照）。

表5-1 回答者の家庭の実権所有者の実態

| 家庭の実権 所有権 | 年 齢 層 | | | | 性 別 | |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | 男 | 女 |
| 夫 | 14.6 | 14.4 | 13.1 | 12.6 | 14.3 | 13.1 |
| 共同 | 69.7 | 58.4 | 55.8 | 60.3 | 61.0 | 57.8 |
| 妻 | 16.0 | 27.2 | 31.1 | 27.2 | 24.7 | 29.1 |
| 合 計 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 回答数(人) | 175 | 688 | 405 | 302 | 770 | 800 |

上海女性の家庭における地位は、この半世紀の間に質的な変化を遂げてきた。家庭において彼女たちほど多くの実権を握っているケースは、歴史的にも、また洋の東西を問わず、非常に稀である。この独特な現象は、男性の間に、このままどんどん妻権が強くなれば夫の尊厳が損なわれるのではないかという心配を引き起こした。これに対し、フェミニストたちは、上海の妻たちは家庭労働の権利と日常的経済支配権を一手に引き受けているだけで伝統的な家庭主婦の役割と大きく変わらない、と反論する。

それでは、女性がなお一層家庭での実権を掌握していくことは、妻権が夫権に取って代わり、女性が家庭の主人となることを意味するのだろうか。それとも、家庭における妻の地位の向上は表面的なものであり、依然としてただの家庭の主婦なのだろうか。本節では、主役・主婦・主人の三つの概念の区別を通して、上海女性の家庭における役割の変遷を詳述する⁵⁾。

(1) 現代の主役と旧来の主婦との歴史的違い

「主婦」と「主役」は一文字の差だけでなく、それぞれが内包している意味に本質的な違いがある。「主婦」は伝統的な家庭における「男は外、女は内」という性別役割分業の産物である。ここでは、女性には家族を養う能力はなく家事と育児を本分として専念するしかないというニュアンスがある。そのため、「内」は家庭の主婦が掌握する圏内であり、生活の全てである。彼女達は夫から定期的に一定額の生活費を受け取り、夫の意志に従ってそれを使用、管理する。

現代的家庭における女性の「主役」と旧来の「主婦」との間における最も根本的な違いは、現代の「主役」たちは「外」も「内」も既に持っていることにある。現代の妻たちは仕事を通して報酬を得ており、夫と同じく家庭にとって不可欠な収入をもたらしているのである。上海の妻たちの平均月収は815元であり、夫の収入の69.1%に当たる。この収入における両性間の差違は、男女間の賃金格差ではなく、一般的に夫の年齢が妻よりも3歳高く、勤務年数も長いことにある。また、夫の多くは体力を必要とする仕事、高い技術を必要とする仕事、管理職等、リスクが高い仕事に従事しており、そのため賃金が高くなっている点も指摘できる。つまり、社会的には夫が主役を演じるチャンスが多く、それに付随して、夫たちは仕事により多くの時間とエネルギーを差し出している。そのため、家庭において分担できる家事は少なくなるが、妻たちは理解の態度を示している。

また、確かに夫たちの全てが進んで家事を分担しているとは言えない。しかし、若い夫達は家事分担に非常に自覚的である。このことを考慮すると、上海女性は家事を一手に引き受け男性は依然として何もしないという言い方は公正を欠いていると言える。実際、上海の妻の、自分の家庭における地位の評価においては、「平等」に関する満足度が最も高く、最高点の6.03点であった（7点を満点とする。夫の場合は6.05点）。「独立」には5.80点（夫の場合は5.67点）、「相手に尊重されている」には5.51点（逆に夫の場合は5.49点）を与えていた。この採点から見ると、上海の妻たちは明らかに伝統的な主婦の従属的な地位に別れを告げ、自立、自信、自主を持った家庭の女主人公となっている。

(2) 現代の主役と伝統的な主人との本質的な違い

上海家庭における権力モデルが女性に傾斜していることは、妻が夫に取ってかわり家

庭の主人となり、新たな不平等をもたらすのではないかと男性を心配させた。だが、現代家庭における女性の「主役」と伝統社会における男性の「主人」モデルとの間の最大の違いは、家庭における権威が男性から女性へ転換したという性別の問題にあるのではなく、「主役」と「主人」とは全く異なった概念であるという部分にある。以下に、その違いを述べていく。

①権威の性質における違い

伝統的な家庭における支配者・主人の権威は等級制度を前提としており、家庭において夫が妻を治めることは、国家において君主が臣下を治めることの基礎となる。夫の妻に対する主としての地位は、天賦の性別によって与えられ、法により保護される。すなわち、たとえ夫が一家の長たる素質を備えていなくても、彼は正当な家長であり、妻は無条件に従わねばならない。

一方、現代家庭における主役の権威は、夫婦双方の婚姻生活中的コミュニケーションを通して形成されたものであり、民主的な基礎がある。すなわち、妻が夫を尊重することを前提に、より強く家庭に対する責任感を持ち、その家事能力によって家庭のためより尽くし、はじめて夫や家族の信頼を得て威信を獲得できるのである。逆に、夫も家庭の主役になることができる。また、夫婦の双方が「連合して主演となる」ことも、「交代で主演となる」も可能である。調査結果では、誰が家庭の実権を掌握するかは、性別・年齢・教育レベル・職業などで決められるのではなく、家事を切り盛りする能力と家庭に対する責任感が最も重要視されていた（表5-2、5-3参照）。

表5-2 家庭に対する責任意識と家庭管理権の関係

| 日常出費 の管理者 | 家庭に対する責任感 | | | 家庭の実 権を持つ | 家庭に対する責任感 | | |
|--------------|-----------|------|------|--------------|-----------|------|------|
| | 夫 | ほぼ同じ | 妻 | | 夫 | ほぼ同じ | 妻 |
| 夫 | 37.1 | 12.3 | 5.7 | 夫 | 31.9 | 10.0 | 12.0 |
| 共同 | 22.8 | 35.6 | 15.0 | 共同 | 48.3 | 66.9 | 46.4 |
| 妻 | 40.1 | 52.1 | 79.2 | 妻 | 19.8 | 23.1 | 41.5 |
| 合計 | 100 | 100 | 100 | 合計 | 100 | 100 | 100 |
| 回答数(人) | 232 | 972 | 366 | 回答数(人) | 232 | 972 | 366 |

表5-3 家庭管理能力と家庭管理権との関係

| 日常出費 の管理者 | 家庭に対する責任感 | | | 家庭の実 権を持つ | 家庭に対する責任感 | | |
|--------------|-----------|------|------|--------------|-----------|------|------|
| | 夫 | ほぼ同じ | 妻 | | 夫 | ほぼ同じ | 妻 |
| 夫 | 50.6 | 11.0 | 4.6 | 夫 | 38.0 | 8.9 | 8.7 |
| 共同 | 23.6 | 53.3 | 14.1 | 共同 | 47.5 | 77.9 | 50.8 |
| 妻 | 25.9 | 35.7 | 81.2 | 妻 | 14.4 | 13.2 | 40.5 |
| 合計 | 100 | 100 | 100 | 合計 | 100 | 100 | 100 |
| 回答数(人) | 263 | 529 | 778 | 回答数(人) | 263 | 529 | 778 |

②人格と地位の違い

伝統社会における妻は経済的に独立しておらず、人格的にも自由はなかった。家庭関係は男が主、女は従であり、夫尊妻卑であった。現代家庭においては、夫婦それぞれの人格は独立しており、地位も平等ならば、権利も義務も同等である。たとえ妻が主役、夫が脇役であったとして、これは役割分担上の違いに過ぎず、演じる役割に上下・貴賤の差はない。実際、調査結果では、家庭の実権を握っているのが女性であっても男性であっても、どちらも自分の地位の平等性が影響を受けたとは感じていなかった。

③職責と権限の違い

伝統家庭の夫は、子供に対しては教育、扶養権、配偶者を決定する権利を、財産については所有、処理、分配する権利を、家政については管理権を有していた。そして、妻に対しては、支配し、しつけ、離縁する権利を有していた。

これに対して、現代家庭の主役の職権範囲は限定的である。家庭生活をさばき、日常的なやりくりを行い、内外の関係を調整することに対して、より多くの発言権や影響力を持つだけである。その中でも比較的重大なこと、たとえば高級品の購入、プレゼントの贈答、投資、住宅の選択、余暇の計画、子供の進学や就職などは、夫婦で相談の上決定するケースがほとんどである^{原註5)}。

④相互作用の形式の違い

封建的な男尊女卑の礼儀、道徳は、妻が卑屈になることによって夫婦間の衝突を解決するという原則を確立し、夫の主人としての地位を保証し、強化してきた。家庭の団結とむつまじさは、往々にして女性に対する抑圧と、それに対する忍耐の上に成り立っていた。

これに対し、現代家庭の夫婦間における相互作用は双方向的なコミュニケーションの上に成り立っている。主役は意見を求め、相談し、協調しあって、家政を運営していく。衝突時には、夫婦は相互に思いやり、我慢し、譲り合うことで解決を見いだす。決して、主役が権力をかさに着て、脇役を圧倒し、コントロールするわけではない。このため、

脇役に心理的なダメージを与えることはない。調査結果では、妻が優しく思いやりがあると認めている夫は、そうではないとした夫の3.7倍に達している。家庭の主役を演じる妻は、脇役を演じる妻に比べ、優しくないわけではないのである。

(3) 家庭の主役と社会の主役の矛盾と衝突

上海においても中国の他の大都市の家庭においても、妻が家庭における主役になることは比較的多い。これは女性の社会的役割が変化したこと、および家庭での地位の向上の必然的な結果である。特に中国の都市部の女性は結婚後も引き続き就労するため、仕事における地位や収入、労働保険等の待遇面においても夫との差は小さい。

多くの先進国、先進地域では、女性の文化レベルが高く自意識も強いが、家庭における地位は上海や中国の他の都市ほど高くない。これは、彼女たちの「M字型就労」（つまり結婚または出産後、女性は仕事を辞め専業主婦となり、子供が大きくなると再び職に就くこと）と関連している。数年間仕事が中断されると、就労上の評価が低くなり、再就職をしても、往々にしてパートタイムや非技術的なアルバイトに従事する。このため、「男高女低」という社会的地位の格差がさらに拡大され、「夫は主、妻は補助」という家計の維持方式や「男は外、女は内」という伝統的な役割分担を変えることもさらに困難となってきた。

一方、この半世紀の間に、上海における女性と男性の社会的地位の格差は大きく縮められてきた。しかし、上海女性は「二種の生産」と「二種の負担」を背負っている上に、社会の、女性の家庭内役割の対する期待は依然として職場における役割よりも高い。妻たちは仕事を大事にしても、子供や家庭に対する気配りが十分でなければ、しばしば女性失格だと非難される。かりに仕事において出世したとしても、夫の励ましや援助を得られるとは限らない。多くの女性は夫の仕事や家庭のために、社会という舞台の上では脇役に甘んじている。本調査においてもこの傾向を証明することができた。妻の職業は普通労働者である割合は34.3%であり、夫より10.8%高い。妻が技術者である割合は14.3%であり、夫より14%低い。管理職である割合は2.3%であり、夫より7%低い。夫より仕事に成果があると認めた女性はわずか8.3%であるが、夫の方がより成果があると認めた女性は33.3%にも達していた。

そこで、家庭の主役が「陰盛陽衰」となったことの背後に存在する社会的要因およびそのマイナスの側面にも着目しておく。

① 中国の女性が結婚後も働き続ける主たる動機は、生きるための必要である。夫一人の労働では一家全員を養うことが難しいので、生計のため働き続けざるを得ない。ある意味でこれは受け身的な就職とも言える。これに対して、一部の先進国、先進地区の女性は子どもの養育をより一層重視する。さらに言えば、夫の職業的役割上の緊張感も高く、収入も高い。そのため、「M字型就労」も往々にして彼女たち自身が進んで選んだ

結果であり、主体的な選択である。この点では、彼女たちは人生設計やライフスタイルの選択に対し、高い自由度を持っている。

② 上海や中国の一部の都市家庭における女性の地位の高さは、個人の素養の高さを除くと、社会環境によるところが大きい。たとえば、国家は女性の進学、就職、参政を保障する傾斜的な政策を実施しており、福利の形式によってその子供たちが幼稚園に入れるように保障する、さらには働く女性に有利な労働保険制度（特に妊娠・出産・哺乳期中の手厚い待遇は世界的に羨望されている）等を実施している。しかし一部の先進国に比べると、上海および中国の他都市の女性は、教育水準、職業技能、自我意識、競争能力等の面において、依然として大きなひらきがある。

③ 女性が家庭を舞台に主役を演じるケースが多いのは、往々にして社会領域においては脇役立場を充当されているためであり、家庭領域においてジェンダー的特徴のある一種の反動、あるいは転移が発現していると思なすことができる。多くの女性は仕事における競争意識や達成感が薄く、今なお結婚を人生の最重要事業としている。このため、いわゆる「男性より女性が強い」、「かかあ天下」等の謂いは、実質的には、社会的に挫折を受けた女性が家庭に心理的補償を求めるための、ある種の自衛である。決して、女性解放が広く深くいき渡った理想の状態に達したことを意味しているのではない。特に、市場経済は本能的に、コストが高くつく既婚女性労働力を排除する。また、産業構造の調整においても、まずは女性を辞めさせることを免れ得ない。計画経済体制下の女性優遇政策はもはや推進できず、中高年女性は社会競争において新たな挑戦と危機に直面させられているのである。もし女性が家庭の主役であることに満足し、自己陶醉するばかりか、ゆったりと夫に依存した主婦生活に憧れるなら、両性間の格差はさらに拡大し、男女平等および人間の全面的な発展という長期的目標の実現は延期されていくであろう。

6. 結婚生活－親密か、ロマンティックか、一途か

上海家庭における両性役割の平等性と独立性について述べてきた。それでは、夫婦生活におけるさらに深いレベルの領域、すなわち私生活における親密性、ロマンティックさ、一途さはどうであろうか。

海外の学者はよく「共に余暇を過ごす」、「一緒にショッピングする」、「同伴で友人との集まりに参加する」等の共同行動を夫婦関係の親密度を判断する指標だと見なす。そこで、同様の指標で上海の夫婦の結婚生活を調査した。

上海の夫婦がよく行う共同行動では、依然として「(夕食後に) 一緒テレビを見るなど自宅での娯楽」(63.8%)の割合が最も高く、その下に「老親や親戚のところに行く」(40.6%)、「ショッピングする」(25.5%)が挙げられた。休日一緒に映画を見る、公園や郊外に遊びに行く、その他の文化娯楽施設やスポーツ施設へ行く、友人との集まりに行く等のケースは

いずれも10%以下であった（表6-1）。

表6-1 最近夫婦同伴で参加した活動

単位：%

| 活動項目 | 共同活動の頻度 | | | |
|------------------------|---------|------|------|-----------|
| | いつも | たまに | ない | 合計 |
| テレビを見るなど自宅での娯楽 | 3.8 | 26.5 | 9.7 | 100(1570) |
| 映画館、劇場、文化娯楽施設、スポーツ施設など | 3.1 | 36.3 | 60.6 | 100(1570) |
| 公園、郊外、よその街への旅行 | 8.5 | 47.6 | 43.9 | 100(1570) |
| ショッピングする | 25.5 | 51.6 | 22.9 | 100(1570) |
| レストランや娯楽場に行く | 3.8 | 31.7 | 64.6 | 100(1570) |
| 将棋、トランプ、麻雀をやる | 5.5 | 23.6 | 71.4 | 100(1570) |
| 友達の集まりに参加する | 7.4 | 46.9 | 45.7 | 100(1570) |
| 老親や親戚のところに行く | 40.6 | 42.9 | 16.4 | 100(1570) |

夫婦一緒に参加する活動が少ない原因として、中国ではほとんどの家庭が共働きであるため余暇は家事や子供の勉強の付き添いに使われることと、多くの家庭の消費水準がまだ自由に旅行や娯楽に出がけられるほどに達していないことが挙げられる。夜間の生活はテレビを見るのが主であり、祝祭日には老親や親戚を訪ねたり、子供や孫を家に呼んで過ごすことが多い。このため、感情生活、物質生活、余暇生活、性生活等の面で夫婦生活を評価すると、余暇生活に対する満足度が最も低くなっていた（7点満点とし、平均4.07点）。

西洋文化では、夫婦の結婚記念日や誕生日の祝いを重視する。様々に工夫を凝らした記念の行事は、ロマンティックな雰囲気を作り出したり、結婚生活に新鮮さや結束力の維持を増すため演出となっている。これに対して、上海では配偶者の誕生日を祝うことがより多く（全く祝いの行事をしないが45.1%）、結婚記念日はあまり重視していない（全く記念行事しないが66.2%）。祝いの形式から見ると、自宅での食事会や互いに記念品を贈り合うことが主であり、工夫を凝らした記念形式が少ない。しかし、若い夫婦の間では、日常の演出を滋養としてこのような習慣により慣れており、感情を深めていることがわかる。

表6-2 最近、配偶者の誕生日の祝い方法（複数回答）

単位：%

| 誕生日の祝い | 年 齢 層 | | | | 性 別 | |
|----------------|-------|-------|-------|------|------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | 男 | 女 |
| 誕生日カードや祝電 | 2.9 | 1.6 | 0.7 | 0 | 1.3 | 1.1 |
| 誕生日のプレゼント | 19.7 | 10.3 | 4.9 | 5.3 | 9.8 | 8.3 |
| 食事、自宅での娯楽 | 52.6 | 49.9 | 43.7 | 46.4 | 49.2 | 45.0 |
| 旅行またはその他のお祝い行事 | 0.6 | 0.8 | 0.2 | 0.3 | 0.7 | 0.5 |
| なんの祝いもしなかった | 29.5 | 42.6 | 51.9 | 50.3 | 42.5 | 47.5 |
| 合 計 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 回 答 数 | 175人 | 688人 | 405人 | 302人 | 770人 | 800人 |

表6-3 最近、結婚記念日の祝い方法（複数回答）

単位：%

| 結婚記念日の祝い | 年 齢 層 | | | | 全 体 |
|--------------------|-------|-------|-------|------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | |
| お互いにプレゼントを送る | 17.6 | 15.5 | 9.1 | 6.2 | 12.7 |
| 自宅で食事や娯楽をする | 28.6 | 35.4 | 25.7 | 19.4 | 29.4 |
| レストランでの食事やダンスパーティを | 12.6 | 8.0 | 0.6 | 0.4 | 5.9 |
| 旅行 | 3.4 | 3.3 | 1.1 | 0.0 | 2.2 |
| なんの祝いもしなかった | 59.5 | 56.8 | 73.3 | 82.1 | 66.2 |
| 合 計 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| 回 答 数 | 119人 | 362人 | 175人 | 144人 | 800人 |

結婚記念日にはさほど念入りなイベントがないにも関わらず、上海夫婦の間での西洋的な愛情表現方法の流行度は予想を超えている。たとえば、「配偶者は普段、気持ちを表すプレゼントをあなたに贈ってくれたり、意外な喜びを与えてくれたりすることがあるか」という質問に対し、「全くない」と答えたのはわずか35.0%であった。その他、配偶者から「ダーリン」、「あなたは素敵」、「すごい」、「すきだ」など賞賛と愛情を伝える言葉を、一度も言われたことがないと答えた既婚者は僅か28.5%であった。配偶者から「お疲れさま」、「ありがとう」、「すみません」、「ではまた」など日常的な言葉を、一度も言われたことがないと答えた既婚者も僅か16.2%であった。「性生活を除くと、夫婦間で普段親しいふるまいをすることは全くない」と答えた既婚者は僅か18.1%であった。回答者の中でも、若い夫婦ほど甘い言葉と甘い行動で愛を表現・伝達し、夫婦感情を高めていく傾向が見られた（表6-4を参照）。

表 6-4 年齢別に見た夫婦間愛情表現の欠如度合い

単位：%

| 愛情表現の項目 | 年 齢 層 | | | |
|---|-------|-------|-------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ |
| 1. 普段、配偶者から気持ちを表すプレゼントや意外な喜びをもらったことが一度もない | 26.9 | 30.2 | 34.8 | 51.0 |
| 2. 配偶者に「お疲れさま」、「ありがとう」、「すみません」、「ではまた」など挨拶をいわれたことが一度もない | 6.9 | 12.6 | 16.5 | 29.5 |
| 3. 配偶者に「ダーリン」、「あなたは素敵」、「すごい」、「すきだ」など肯定的な愛情表現をいわれたことが一度もない | 14.9 | 21.5 | 27.7 | 53.3 |
| 4. 性生活以外、夫婦間は親しい行為が全くない | 5.4 | 11.8 | 20.2 | 38.7 |

結婚は恋愛に比べると、より現実的で平淡にパターン化されがちである。それにもかかわらず、9.8%の回答者が自分の結婚生活はロマンティックな情緒が溢れていると答えた。中でも、若い夫婦では「とてもロマンティック」、「比較的ロマンティック」という回答が21.1%に達した。また、女性の方が男性よりもロマンティックラブに対する期待が高いためか、「自分の婚姻が全くロマンティックでない」という回答の割合は女性において男性より5.1%高かった。

なお、夫婦間で愛情を表現する頻度も婚姻の幸福感に関連していることがわかった。つまり、関係が親密であり、ロマンティックな交流のある夫婦であればあるほど、双方の感情も深まり、婚姻の幸福に対する満足度が高くなっていった（表6-5）。

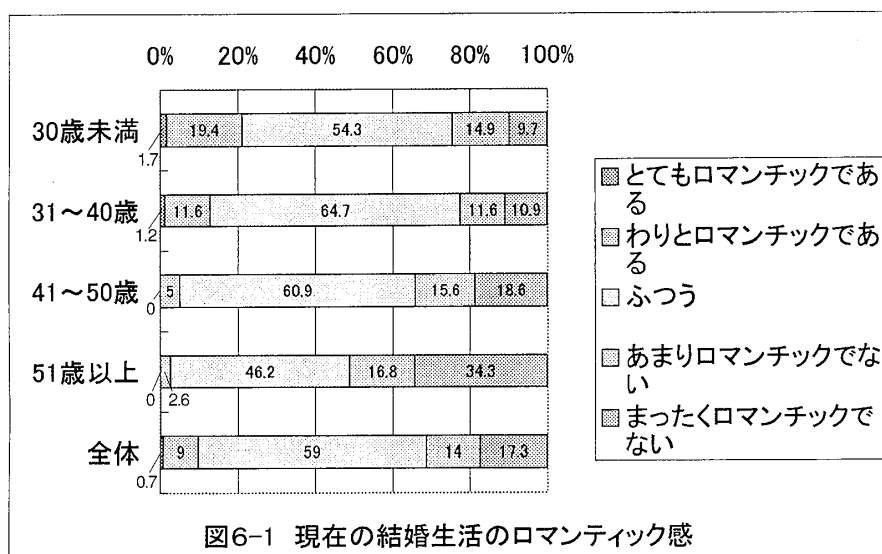


表 6-5 親密・ロマンの度合いに見た回答者の結婚幸福度に対する自己採点

単位：点

| | 常にある | 時々ある | たまにある | 全くない |
|--|------|------|-------|------|
| 1. 配偶者が平素から気持ちを表すプレゼントや意外な喜びを送ってくれる | 6.3 | 6.1 | 5.8 | 5.3 |
| 2. 配偶者がよく「お疲れさま」、「ありがとう」、「すみません」、「ではまた」など挨拶を言ってくれる | 6.3 | 5.9 | 5.4 | 4.9 |
| 3. 配偶者が「ダーリン」、「あなたっていいね」、「すごい」、「すきだ」など肯定的な愛情表よく言う | 6.4 | 6.0 | 5.6 | 5.2 |
| 4. 性生活以外、夫婦間の親しい行為がよくある | 6.4 | 5.9 | 5.5 | 5.3 |
| 5. 今現在、結婚生活は依然としてロマンティックな情緒がある | 6.6 | 5.8 | 5.5 | 5.0 |

このように、たとえ小さなプレゼントでも、たった一言「お疲れさま」と言うだけでも、熱いキスでも、シンプルな詩でも、すべて結婚生活に不可欠なスパイスであり、夫婦の關係に橋をかけるものとなる。結婚生活の長い旅路には、随所にロマンティックなバラばかりが見えるわけではないが、真心の込められた眼差し、一言の賛辞、一枚のカードのなど「細部に真心が現れる」ようなことをなし、相互にコミュニケーションをとり、理解しあってはじめて、愛情は恒久的に命を保つことができるのである。

では、上海夫婦の愛情は一途なものだろうか。メディアが煽りたてるように、既婚男女は婚外交渉の誘惑に、それほど蝕まれているのだろうか。調査結果では、婚外の恋愛があると認めたのは、夫のわずか2.3%、妻のわずか1.9%であった。しかし、もし浮気の疑いや、浮気の疑いが原因の喧嘩も含めると、9.4%の夫婦が自分または配偶者の行動に怪しい面があると認めている。中でも、31歳以下の若い男女がより多く相手の浮気に困っていると答えている（12.5%）。これに対し、50才以上は最も少ない（4.7%）。

回答者の学歴が中学校、または中学校以上の場合、浮気の確率には大差がないが、小学校または小学校以下の場合に低くなっている（わずか2.7%）。職業では、商業、サービス業に従事する既婚者は感情を他に移したり、配偶者に疑惑を抱くことが最も多い（13.5%）。その次が管理職（13%）であった。労働者はふるまいや観念がやや保守的であるのか、他に比べ機会が少いためか、わずか7.7%であった。

婚外交渉は極めてプライベートなタブーとされる話題であり、回答者が警戒し実状を隠した可能性が高い。そのため、実際にはもう少し比率が高くなる可能性がある。実際、調査項目には、以前に婚外交渉があったかどうかや、婚外交渉に対する疑いも含まれていた。そうすると、調査結果に反映された婚姻外の恋愛の比率はやはり低いことになるだろう。しかし、一方が婚外の恋愛を認めている、あるいは婚外の恋愛の疑いを抱いている回答者

と、双方とも実際の婚外の恋愛もその疑いもない回答者とを比べてみると、前者の配偶者や結婚生活への評価が低くなっていた。例えば、前者の「自分は配偶者に信頼されている」の採点は平均5.21点（後者の場合は6.09点）、「自分は配偶者に尊重されている」の採点は平均4.76点（後者の場合は5.75点）、「自分の婚姻の幸福度」の採点は平均5.00点（後者の場合は5.85点）であった。つまり、一方あるいは双方の不忠や信頼の喪失は夫婦感情を傷つけ、婚姻の安定性に危険をもたらしていることが分かる。

なお、調査結果では以下のことも明らかになった。すなわち、「自分が配偶者に信頼されている」についての既婚男女の採点は平均5.88点であり、「気を使われている」、「尊重されている」、「理解されている」等の項目よりも高かった。また、「婚姻関係において満たされない欲求があった場合、婚姻外に補いを求めてもいい」に対して肯定的な態度を示したのはわずか6%、「一方の出張などが原因で半年以上別居した場合、配偶者が他者と性的な関係を持つことは許せる」に同意したのもわずか6%であった。これらの調査結果を通して、上海の夫婦の信頼関係、彼らの婚姻に対する真摯な態度を垣間見ることができた。

7. 夫婦間の衝突の原因とその緩和

夫婦は朝夕毎日顔を合わせるものである。婚前にはどれほど恋愛に夢中になっていたとしても、結婚後は日常の些細なことや過負荷となる二重の負担や味気なく平板な生活に直面し、摩擦や言い争いも避けられない。それでは、上海夫婦における衝突はどのような原因から引き起こされているのだろうか。

夫婦間の衝突というと、周囲の人は「愛人が現れた」、「経済的問題」かなどと尋ねてみたり、「性生活の不一致」のような人に言いづらいことがあるのかと推測してみたりする。しかし、「夫婦間で、普段どんな原因で喧嘩するのか（三つまで答えて下さい）」という質問に対して、上位第三位は、「子供の教育方法の不一致」（35.4%）、「家事」（28.1%）、「嫁姑など親族関係」（11.3%）であり、「経済問題」（8.4%）は第4位であった。また、32.5%の回答者は「普段喧嘩はしない」と答えていた。

以上の回答は夫あるいは妻が単独で答えたものである。そこで各自の回答に技術的な処理を施し、つまり一方が認めた喧嘩の原因も当該夫婦における衝突の原因として計上すると、「子供の教育方法の不一致」46.8%、「家事の分担が不公平」39.6%、「嫁姑など親族関係にしこりがある」17.3%、「経済問題」13.6%となった。これらに対し、婚外交渉が引き金となった衝突は僅か1.9%、性生活の失調が不仲の原因となったものもたった2%であった。同時に、双方が等しく「普段は喧嘩しない」と答えたものは20.8%まで減少した（表7-1参照）。

表7-1 日常に発生する夫婦間のもめ事の原因（複数回答）

単位：%

| | もめ事の原因 | | | | | | | | もめ事 なし | 合 計 |
|-------------------------|------------------|-----------------|-----------------|------------------|----------|------------------------|-----|-----|-----------|-----------|
| | 経済的 原因に よる | 子供の 教育方 針 | 家事に 関連し て | 妻また は夫の 悪癖 | 婚外交 渉 | 嫁姑問 題など 親戚関 係 | 性失調 | その他 | | |
| 妻が認める もの | 9.5 | 35.5 | 26.0 | 6.6 | 1.3 | 10.9 | 1.1 | 1.6 | 32.1 | 100(800人) |
| 夫が認める もの | 7.3 | 35.5 | 30.3 | 3.0 | 0.9 | 11.7 | 1.3 | 2.6 | 32.9 | 100(770人) |
| 少なくとも どちらか一 方が認める | 13.6 | 46.8 | 39.6 | 8.5 | 1.9 | 17.3 | 2.0 | 3.8 | 20.8 | 100(800対) |

また、調査結果から、夫婦間の衝突は、結婚生活の時期によって、その原因が違うことが明らかになった。たとえば、嫁姑など親族関係によるものは結婚後5年内に多発し、子供の教育方法の不一致によるものは結婚後10～20年でよく見られ、家事による摩擦は21～25年で激化する。しかし、経済が原因となる紛糾には、時期による差異は見られなかった。

結婚後10～20年で子供の教育方法の不一致を原因とするの齟齬が最も多いのは、この時期には子供の進学に対するプレッシャーが大きくなることが考えられる。子どもに過剰に期待した場合に、夫婦間で責め合い矛盾を引き起こしがちなのである。

結婚初期には嫁姑など親族関係のしこりが引き金となるケースが多いのは、家族構成と関連しているためであろう。上海の住宅事情は非常に厳しいため、新婚夫婦の多くは家を買ったり借りたりする余裕を持っていない。また、勤務年数も短いため、職場の住宅の分配にも与れない。そのため、やむを得ず親、とりわけ夫側の親と同居することが多くなる。上海の家族構成に関する統計にも現れており、結婚後5年以内の若い夫婦が親と同居する割合は67.3%に達している。この後、結婚年数が経つにつれ独立するものが増加し、結婚後16～20年では三世代同居家庭は19%となる。同居する二つの世代の夫婦は見聞、経験、考え方、ライフスタイル、趣味や嗜好などに違いがあるため、それが夫婦関係にまで緊張感をもたらしてしまうことも少なくないのである。

結婚後21～25年で家事が引き金のもめ事が増える原因として、この時期の中年夫婦はそれぞれ職場において中堅幹部となっている人が比較的に多いことがあげられる。さらに家庭には上に老人、下に子供がおり、仕事と家事の二重の負担が一層に重くなったためである。

「一方の婚外交渉」が原因となる喧嘩は、先に述べた技術的処理を施しても、9.4%という割合より遙かに低い。9.4%という数字には、一方は婚外の恋愛をしているが、その配偶者は知らないというものも含まれている。この場合は、そのために普通は喧嘩には至らない。また、以前に婚外交渉や、一方の異性との交流のはなはだしさに感情的危機を経験した夫婦の場合にも、すでに乗り越えているケースや、一方が不愉快な思い出を避けて回答をしたケースがある。我々が行った座談会において、ある回答者は、面接調査時に既に配偶者の婚外交渉を疑っていたが、根拠がなかったため喧嘩はしないと回答した、と認めている。後に夫のふるまいはどんどんひどくなり、夫婦間で激しく衝突したという。また、一方の不誠実ははなはだしくもう一方の感情を傷つける。このため、若い夫婦の間に第三者の介入がある場合、その婚姻関係は解消される可能性が大きくなる。

我々が1995年に上海のある地区の人民法院で行ったサンプル調査の結果によれば、夫婦が離婚する最大の原因は婚姻外の恋愛であり、全体の36%を占めていた。ここから次のようなことが言えるだろう。すなわち、現在婚姻関係にある夫婦において婚外交渉が引き金となる喧嘩の割合は小さい理由として、婚外の恋愛は隠蔽性が高く配偶者が知らなければしばらくは波風が立たないこと、婚外の恋愛により衝突を起こした夫婦は既に離婚済みであることが上げられるであろう。

次に、上海の夫婦における衝突の頻度はどうであろうか。「ここ一年間に喧嘩をしたことがあるか」という質問に対して、双方ともに「ない」と答えたのは30.0%であった。少なくとも一方が「しょっちゅう」と答えたのは4.3%、「ときどき」は21.1%、「たまに」は44.6%であった。また、結婚5年未満の回答者は「いつも」または「ときどき」喧嘩することをより率直に認めていた（35.5%）。一方、結婚26年以上の夫婦では、わずか13.9%であった。

表7-2 結婚年数別に見た夫婦衝突の頻度

単位：%

| ここ一年間喧嘩した ことがあるのか | 結婚年数 | | | | | | |
|----------------------|------|------|-------|-------|-------|------|------|
| | 0~5 | 6~10 | 11~15 | 16~20 | 21~25 | 26~ | 全 体 |
| いつも | 3.7 | 6.6 | 3.6 | 4.8 | 2.6 | 2.6 | 4.3 |
| ときどき | 31.8 | 20.8 | 23.0 | 21.4 | 20.5 | 11.3 | 21.1 |
| たまに | 45.8 | 46.2 | 46.4 | 45.2 | 53.8 | 36.4 | 44.6 |
| しない | 18.7 | 26.4 | 27.0 | 28.6 | 23.1 | 49.7 | 30.0 |
| 合 計 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| | 107 | 197 | 222 | 84 | 39 | 151 | 800 |

夫婦間の衝突の程度を考察するため、「ものを投げつける」、「罵る」、「殴る」などの攻撃的なふるまいがあったか、「しばらく実家に帰る」、「相手方の職場や居民委員会に訴え調停

を求める」があったか、等の指標を設けた。

双方の回答はしばしば一致しておらず、たとえば、男性が妻を殴ったと認めていても、女性がこのことを隠していたり、あるいは、女性は夫に殴られたと訴えたが、男性はこの話題を避けていたりした。一般に回答者が夫婦喧嘩の程度を誇張するという傾向は少なく、むしろ自分の結婚の消極的な側面を隠す傾向があることを考慮して、統計時には、片方が「数回」と述べ、もう片方が「あった」または「ない」としても、一律に「数回」と分類することにした。一方が「あった」と述べた場合にも、同様の類推を行った。

夫婦喧嘩時に最も多く行われたふるまいは「意地になって相手にしない」であり、夫の57.4%、妻の77.6%が、これを常套手段として使ったことがあるとした。その次として、夫は罵ることで気分を解消し(44.2%)、妻は泣くことで恨む気持ちを解消していた(70.1%)。このほかに、男性では天賦の体力、すなわち拳骨を用いて鬱憤をはらすことが多く、女性では離婚をほのめかして脅かしたり、性生活の拒否や実家に帰るなどの示威行動が比較的多く見られた(表7-3)。

表7-3 婚姻衝突における男女の行為表現の差異

単位：%

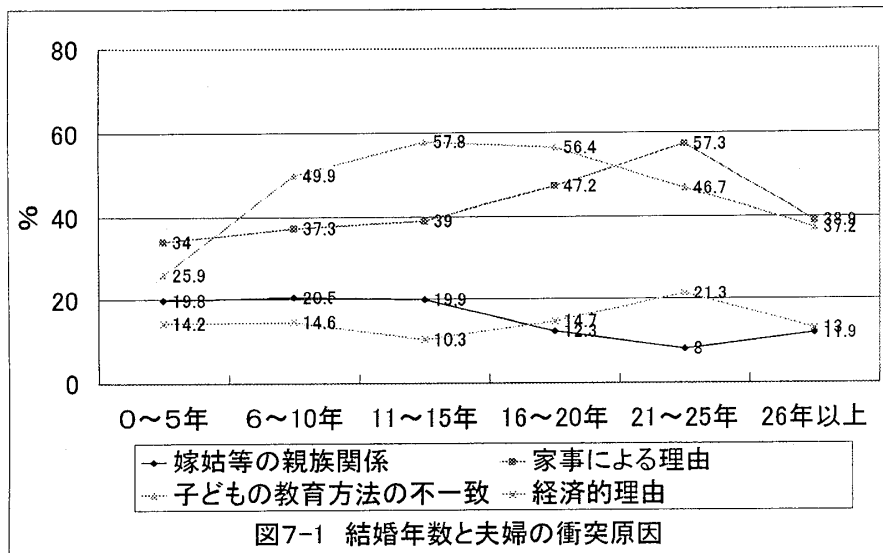
| 婚姻衝突における行為表現 | 夫 | | | 妻 | | |
|--------------------------------|------|------|------|------|------|------|
| | よくある | ある | ない | よくある | ある | ない |
| ものを投げつける | 2.1 | 19.0 | 78.9 | 1.6 | 16.4 | 81.0 |
| 泣く | 0.8 | 8.9 | 90.4 | 10.6 | 59.5 | 29.9 |
| いじじになって相手にしない | 6.1 | 51.3 | 42.6 | 12.8 | 64.9 | 22.4 |
| 人を罵る | 3.6 | 40.6 | 55.8 | 5.0 | 36.1 | 58.9 |
| 人を殴る | 1.6 | 17.0 | 81.4 | 1.0 | 10.0 | 89.0 |
| 家事や子供の教育をしない | 2.3 | 16.8 | 81.0 | 0.9 | 14.9 | 84.3 |
| 自分の親や親族に訴える | 0.5 | 12.6 | 86.9 | 2.1 | 27.4 | 70.5 |
| しばらく実家に帰って住む | 0.1 | 2.0 | 97.9 | 1.4 | 18.8 | 79.9 |
| 相手の親や親族に訴える | 0.4 | 14.1 | 85.5 | 1.3 | 11.1 | 87.6 |
| 同僚や友人に訴える | 0.9 | 16.8 | 82.4 | 1.6 | 26.3 | 72.1 |
| 暫く同僚宅・友人宅・会社に 住む | 0.1 | 2.6 | 97.3 | 0.1 | 2.9 | 97.0 |
| 性生活を拒絶する | 0.3 | 8.4 | 91.4 | 1.4 | 25.4 | 73.3 |
| 離婚だと脅かす | 0.6 | 7.5 | 91.9 | 1.0 | 14.8 | 84.3 |
| 相手の会社に訴える、または 町内会に行って調停を求める | 0.1 | 1.8 | 98.1 | 0.8 | 2.8 | 96.5 |

年齢別に既婚男女の衝突時における攻撃的ふるまいをみていくと、以下のことがわかる。つまり、「ものを投げつける」ことは年齢に関係がないが、「罵る」「殴る」「しばらく実家に帰る」、「性生活を拒否する」、「離婚をほのめかす」などの行為は、中高年の夫婦よりも、若い夫婦の間において発生率が遙かに高くなっていた。これは主として、新婚夫婦はちょうど婚姻生活に適応していく段階にあり、加えて若さ故の強い自己意識や負けず嫌いの心理が働き、衝突時にしばしば忍耐力と寛容さに欠けるためである。その結果、一時的に攻撃的なふるまいをしたり、すぐに離婚通牒を出したりしがちなのである（表7-4）。

表7-4 年齢別に見た婚姻衝突における攻撃的行為

単位：%

| | 年 齢 層 | | | | 合 計 |
|--------------|-------|-------|-------|------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ | |
| ものを投げつける | 23.3 | 19.3 | 22.6 | 14.2 | 19.6 |
| 人を罵る | 53.4 | 47.1 | 43.6 | 26.1 | 42.7 |
| 人を殴る | 25.0 | 17.1 | 13.4 | 6.0 | 14.8 |
| しばらく実家に帰って住む | 17.0 | 8.3 | 4.6 | 2.8 | 7.3 |
| 性生活を拒絶する | 31.8 | 19.6 | 16.1 | 7.9 | 17.7 |
| 離婚だと脅かす | 22.7 | 13.4 | 10.7 | 4.4 | 11.9 |



性別では、31才以下の若い夫の言葉で相手を傷つける比率は高く、64.9%となっていた（妻の場合は47.9%）。一方、若い女性も弱みを見せず、喧嘩時に暴力を振るう比率は24.4%に達しており、男性の26.4%と大差がなかった。このほかに、泣く、相手に親に訴える、実家に帰る、性生活を拒絶する等は、かつては女性の秘密兵器だと思われてきた（若い妻の

利用率はそれぞれ87.5%、22.7%、19.3%、41.4%)。しかし、若い男性の利用率もそれぞれ15.9%、18.1%、4.5%、14.8%となっていた。これに対し、50才以上の男性による利用率はそれぞれ6.0%、3.1%、0.6%、2.5%と、ごくわずかであった。

衝突の緩和から見ると、上海の男性は度量が広く、しばしば自身が我慢して妻に折り合い、和解をなしている。衝突後に進んで妻と仲直りする若い夫は55.4%に達していた。しかし、高齢の夫では35.7%であった。また、進んで譲歩する妻は8.5%であり、双方どちらも譲らないのは2%しかない。

夫婦間の衝突では、内部で解消するほかに、時には外部の助けも重要なクッションとなっている。衝突後に相手の職場や居民委員会等の組織へ行き調停を求める（しばしば事態が深刻化し、調和的な状況下では難しいケースであるが）回答者は2～3%あったが、より多くは親に訴えたり、援助を求めたりしていた。結果によれば、夫婦の少なくとも一方が親や親族の調停を求めたことがあるものは53.5%、離婚を支持または反対されたことがあるものは3.8%、双方の両親が助けも干渉もしないものは67.9%であった。このように、親族関係は夫婦間の衝突に対する重要なクッションの役割を果たしていることがわかる。このほかに、同僚や友人に訴えたり、泊めてもらったりする者も少なくない。その中で、若い男性では、同僚や友人に訴えたものは26.4%、女性は35.3%であった。同僚・友人は彼らに靈丹妙薬を与えてくれるとは限らないが、当事者の鬱憤を解消するクッションにはなる。友人や同僚を組織や上司を比べると、親近感や安心感、人間味においてまさっていることは疑いない。

8. 共白髪まで添い遂げる－上海人の神話

アメリカでは2組に1組の夫婦が離婚するというような報道を、新聞紙上によく見かけられる。つまりアメリカでは、結婚登録をした夫婦2組に対し、離婚を許可される夫婦が1組ある（離婚を許可される夫婦の多くはその年に結婚した夫婦ではないにもかかわらず）ことになる。このため、アメリカは世界で最も離婚率が高く、家庭に対する観念が最も稀薄で、婚姻が最も不安定な国だとみなされている。もし同様の離婚率の計算方法を用い、同様に推測すると、上海では1980年には51組に1組が離婚し、1996年には3.6組に1組が離婚している^{原注(6)}。離婚率上昇の幅は大いに人々を瞠目させ、不思議がらせるものである。上海人の考え方が更新されるスピードは、何をもって世界記録を超えたのか、婚姻は上海の経済発展にとって足かせなのか、共白髪まで添い遂げることはもはや上海人の神話になったのかと。

ここでまず説明すべきことは、結婚数中に占める毎年の離婚数の割合において上海の離婚率の上昇速度が世界記録を作ったとされることが、科学的ではないということである。離婚したカップルのほとんどはその年に結婚したカップルではない。さらに重要なことは、

毎年の結婚数は人口の年齢構成と大いに関わっている。中国では人口政策の影響を受け、出生率の変動が大きく、その結果、人口の年齢構成も大きく変動している。その年その年に結婚適齢期に入る人口数も大きく違ってくるのである。たとえば、上海では、1980年には16.8万組が結婚し、1981年には28.25万組が結婚した。これに対して、1996年には結婚の登記はわずか8.96万組しかなかった。このように、単に離婚数と結婚数の比で離婚率を統計するのは合理的とはいえないのである。

もちろん上海の離婚率上昇の速度が確実に早まっていることは否定できない。世界的によく使われている通常の離婚率計算方法、すなわち人口千人ごとの離婚カップル数では、上海は1980年には0.29%であったが、1996年に1.8%に達し、16年間で5倍となっている（前記の計算方法では14倍になる）^{原注(7)}。だが、欧米などの先進国と比べると、まだ高いとは言えない。アメリカでは1993年に4.60%、イギリスは1991年に2.96%、カナダは1990年に2.94%、オーストラリアは1992年に2.61%、スウェーデンは2.53%、ノルウェーは2.38%、フランスは1.89%に達している^{原注(8)}。

次に、1980年代以来、上海の離婚率が非常な速度で上昇した重要な原因として、それまでの基本数値が低かったことがあげられる。たとえば、1980年の離婚率は0.29%で、全国的にも低い方であった（1980年全国の離婚率は0.35%）^{原注(9)}。恐らく上海の政府末端組織やコミュニティの調停システムがよく整っており、社会が個人のプライバシーを厳しくコントロールしていたためである。それに、当時の居住の条件も離婚を制限したのであろう。それゆえ、1980年代以降の離婚率の上昇は、それまでに蓄積されてきた婚姻の危機の顕在化とも言えよう。上海は現在もなお全国離婚率最高の地域ではない。例えば、1995年全国離婚率上位をランクした地域は新疆（3.25%）、黒竜江・吉林（いずれも2.01%）と遼寧（1.97%）であった^{原注(10)}。

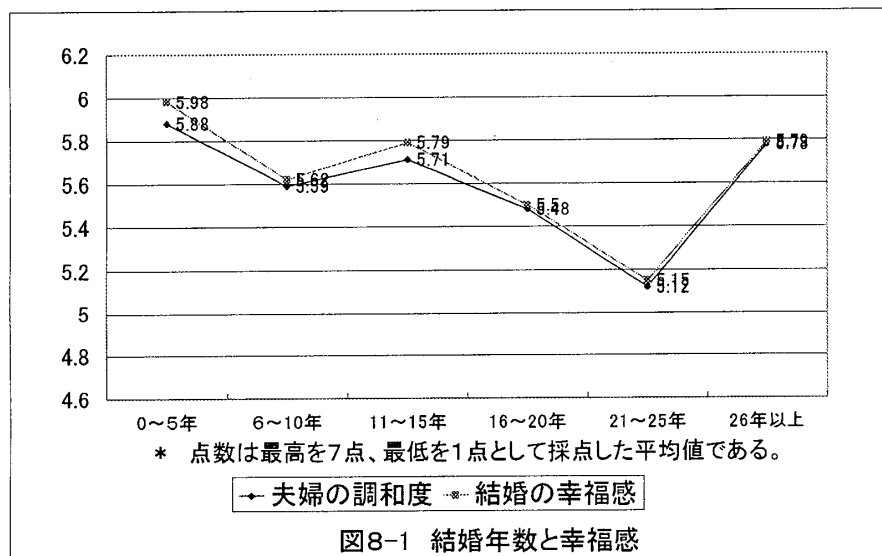
我々の調査結果は、基本的に「婚姻は上海の経済発展の足かせであった」、「共白髪まで添い遂げることは上海人の神話になった」などの論調を否定するものである。その根拠は以下に示す通りである。

(1) 結婚生活の満足度が比較的高い

夫婦関係が維持できるかどうかは、双方の結婚に対する欲求が満足されたかどうか、幸せだと感じるかどうかに関わっている。調査において、7点を満点に自己採点を行った。すると、「夫婦仲がいい」、「幸福な結婚である」に対して採点が4点以下であった回答者はそれぞれわずか3.3%と4.1%であり、平均採点はそれぞれ5.66点と5.71点であった。彼らの中で、夫婦感情を「とても深い」あるいは「比較的に深い」と思っている人は67.1%、「普通」だと思っている人は30.8%、「冷淡である」あるいは「決裂した」と思っている人はわずか2.1%であった。相手が理想的なパートナーであるかどうかという質問に対して、76.6%の回答者は「大いに合格している」または「基本的に合格している」と肯定的な評価をした。

その他、「普通」は19.2%、「余り合格していない」「まったく不合格だ」はわずか4.3%であった。

結婚生活に対する満足度では、夫の方が妻よりも高い。男性の「夫婦仲がいい」に対する採点は平均5.70点（女性は5.62点）であり、「幸福な結婚である」に対する採点は5.77点（女性は5.65点）であった。このほかに、結婚初期の男女は双方の関係を高く評価し、結婚21年～25年目は沈滞期に陥り、その後、満足度が再び上昇する傾向があった。（図8-1を参照）当事者の教育レベルと夫婦仲、結婚幸福感とは関係がなかった。



(2) 関係が安定しており、離婚の意向は少ない

上海の夫婦には、結婚前からの基本的な関係が良好であったものが多いため、結婚後も協調しあって満足することができ、挫折感や別れたいという気持ちを持つ人が少ない。調査結果では、自分の婚姻に常に失望感を抱く人は2.5%、この一年「つねに」離婚の意向を抱いていた人は1.1%、時々別れたいと思う人は3.9%であった（表8-1を参照）。また、「思う通りに行かないところもあるが、仲良く共白髪まで添い遂げることができると思う」という項目に対して、80.6%の回答者は肯定的、4.3%の回答者は否定的な判断をした。「もし別の人と結婚したら、多分今より幸せになれる」という項目に対しては、7.1%の回答者は肯定、37.6%の回答者は否定をした（その他はどちらも言えないと答えた）。「配偶者は離婚を言い出す可能性があるか」という推測について、0.7%の回答者は肯定し、2.5%の回答者は「多分」と、11.7%の回答者は「何とも言えない」と答えていた。

それでは「内で損をした分、外で補完する」等の俗諺があるが、実際、上海の人の性観念はどれほど開放的になったのだろうか。調査結果では、「一方の出張などが原因で半年以上別居した場合、配偶者が他人と性的な関係を持つことは許せる」という項目に対し、6%の回答者だけが肯定し、79.7%の回答者はきっぱりと否定した。また、「婚姻関係において

満たされない欲求があった場合、婚外に補いを求めてもいい」という項目に対しては、5%の回答者のみが賛成し、74.6%の回答者ははっきりと反対した。このように、大多数の上海夫婦は婚姻の責任を重んじ、忠貞、排他の原則を守っていることが分かる。なお、若い夫婦の間では、離婚の意向を持つ人が比較的多いが（表8-1参照）、それは若い人が離婚を気軽に考えているわけではなく、彼らの婚姻の質に対する期待が高いためである。

表8-1 ここ一年間回答者の離婚意向

単位：%

| 離婚意向 | 年齢層 | | | | 性別 | | 総計 |
|-------|------|-------|-------|------|------|------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～51 | 51～ | 男 | 女 | |
| 常にある | 2.3 | 1.6 | 0.7 | 0.0 | 1.0 | 7.3 | 1.1 |
| 時々ある | 6.3 | 5.1 | 2.0 | 2.3 | 3.2 | 4.5 | 3.9 |
| たまにある | 13.1 | 12.2 | 9.6 | 4.3 | 9.5 | 10.8 | 10.2 |
| 全くない | 78.3 | 81.1 | 87.7 | 93.4 | 86.2 | 83.5 | 84.8 |
| 合計 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 | 100 |
| | 75 | 688 | 405 | 302 | 770 | 800 | 1570 |

調査結果によれば、若い男女は婚姻における主要な絆は愛情であると認めた割合が最も高いが（31才以下で61.1%、31～40才で49.1%、41～50才で38.0%、50才以上で39.4%）、自分の婚姻に全く失望感を覚えたことがないと答えた割合は最も低かった（31才以下で47.4%、31～40才で59.3%、41～50才で62.2%、50才以上で77.2%）。また、「結婚はそんなものなので、周りの夫婦もみんなほどほどに我慢して暮らしている」と思う若い回答者は中高年者より遙かに少なかった。

若い世代の結婚観はより開放的、近代的であり、また若さや可塑性といった強さもあるために再選択の自由度も高い。その上、離婚してはいけないという意識も希薄化したにも関わらず、彼らが持つ婚姻道徳も性観念も中高年者と比べ、大きくずれてはいない。表8-2に示す通り、31才以下の若い回答者の中では、「婚姻関係において満たされない欲求があった場合、婚外に補いを求めてもいい」に対して肯定的な態度を示したのはわずか6.9%であり、「片方の出張などが原因で半年以上別居した場合、配偶者が他人と性的な関係を持つことは許せる」に同意したのも5.1%に過ぎなかった。このことから、愛に忠誠を尽くし、共白髪まで添い遂げることは依然として大多数の若い夫婦の目標だと言えよう。

表 8-2 年齢別に見た回答者の結婚観

単位：%

| 以下の観点到賛同する | 年 齢 層 | | | |
|--|-------|-------|-------|------|
| | ～30 | 31～40 | 41～50 | 51～ |
| 1. もし配偶者が他に好きな人ができたら、よく話し合った上、別れてよいと思う | 48.0 | 50.7 | 46.7 | 41.1 |
| 2. 結婚はそんなもんなので、周りの夫婦もみんな適当に我慢して暮らしている | 17.1 | 28.1 | 32.8 | 31.8 |
| 3. 思う通りに行かないところもあるが、仲良く共白髪まで添い遂げることができると思う | 80.6 | 76.9 | 84.9 | 83.4 |
| 4. 片方の出張などが原因で半年以上別居した場合、配偶者が他人と性的な関係を持つことは許せる | 5.1 | 6.8 | 7.2 | 3.0 |
| 5. 婚姻内満たせられない欲求があった場合、婚姻外に補いを求めてもいいのだ | 6.9 | 6.1 | 4.1 | 3.0 |

大多数の上海夫婦は仲睦まじい関係を維持しており、離婚は依然として少数である。だが、婚姻の不安定要素はないわけではない。

まず、婚姻の質から見れば、「愛があるため結婚した」、あるいは「愛があるから婚姻関係を維持してきた」と回答した上海夫婦の割合はいずれもそう高くはない。31才未満の若い夫婦にしても、「愛の極限に達して自己コントロールできなくなる」あるいは「幸せで楽しくお互いに愛しあっている」などの理由で結婚に至ったはずか52.6%、「今の夫婦関係の主な絆は愛である」と答えたのは61.1%（50才以上の回答者の場合はそれぞれ21.8%、39.4%）であった。

感情生活に関して高い自己評価をした夫婦が多いのに対して、相当数の人は性生活や余暇生活には不満を感じている。たとえば、最近の性生活について、その度、あるいは度々性的快感を体験した男性と女性はそれぞれ47.0%と23.1%であり、性生活への満足度を1～4点の間に採点した人は、それぞれ42.2%と40.7%あった。また、前述のように、いつも一緒に映画館や文化、娯楽施設に行く上海夫婦は3.1%、いつも一緒に公園や郊外あるいは遠くへ旅行に行く上海夫婦は8.5%、いつも一緒に友人の集まりに参加する上海夫婦はわずか7.4%であった。余暇生活に対する満足度を1～4点の間に採点した男女はそれぞれ63.2%と61.4%であり、「家庭は台所の食器交響曲みたいなもの」と思う人は25.9%（その中男性28.8%、女性23.3%）あった。これは彼らの単調であくせくした、楽しみの少ない婚姻生活への溜息とも思える。

次に配偶者の代替可能意識を見ると、婚姻における感情のウエートが上昇する一方、個人のプライバシーへの行政組織の干渉が減少し、上海人が持っていた「離婚してはいけな

い」という意識がどんどん弱まっていることがわかる。その上、かつて経済や住宅の理由で縛り付けられていた人も生活レベルの向上や居住条件の改善でとまどいが少なくなった。実際、調査結果では、「もう一度選べるなら、同じ人を配偶者を選ぶ」と答えた人は54.6%（女性50.8%、男性57.4%）であった。「配偶者は最も気に入った人で、取り替えはできない」という項目に対しては、回答者の三分の一は可否の判断を下さないか、否定的な判断をした。「もし配偶者が他に好きな人ができたら、よく話し合った上、別れてよいと思う」という項目を肯定した人は47.5%に達しており、配偶者は取り替えできないという意識が弱くなりつつある傾向が理解できる。

市場競争が社会の分化を一層促すに従い、職業、収入、社会的地位等の面において夫婦間の差異も大きくなるだろう。それによって、それぞれの持つ自己資源、価値観、結婚に対する要求の変化が双方の心理的バランスを崩すために、夫婦関係において調和を失うことも多くなるであろう。また、文化市場の開放、社会の流動化、生活水準の向上によって、人々の視野や交際範囲が拡大され、それに従い婚姻に対する意識、考え方、行動方式も変化していくだろう。恋愛や結婚により高い質をもとめ、選択の自由化、多様化も更に進むであろう。しかし、どんなに思想的に開放された上海であったとしても、離婚はまだ重い代価を伴う違反であり、イレギュラーで不名誉な行為だと見なされている。婚姻関係に対する適応や愛情の更新は誠意や芸術性の必要なことである。夫婦間での争いを止められず、困惑している人たちは、もういくばくかの忍耐とテクニックが必要なのであろう。

現在は社会の過渡期であり規範が緩くなっているために、一部では私欲が先行し、道徳や義務が忘れ去られている。そして、誘惑にあらがえず婚外交渉に至り、配偶者や子供を傷つけることもある。これもまた婚姻の不安定要因の一つとなるであろう。

本稿では、婚姻関係の質を高め、安定をもたらすための規律を探ることを目標に、上海における恋愛と婚姻の現状のついて、そのアウトラインを描いてきた。具体的には、両性が出会い愛しあうまで、婚姻に至りお互いに作用しあっていくまで、そして両性の意識に分岐が生まれて再び共同認識に達するまで、さらには両性の衝突から離婚の過程およびその心理、行動を詳述した。以上を通し、夫婦という異質なものを整合させ、調和させる共生の規律を提示してきた。

訳注

- 1) トンヤンシーは、将来息子の嫁とするために幼いうちに女兒を引き取り、育てる習慣あるいは、引き取られた女兒を指して言う。解放前の中国において、特に貧しい農民の間で、婚資を安くあげるために取られた習慣だとされている。
- 2) 本稿は『世紀之交中国人的愛情和婚姻』（徐安琪編，中国社会科学出版社,1997）中の第8章「上海人の愛情と婚姻」の全訳である。『世紀之交中国人的愛情和婚姻』は上海社会科学院において1995年から1996年にかけて行われた「中国社会転換期的婚姻質量研究」の結果をもとにしている。この研究では、上海、広州、甘肅、ハルビンの4地区において、それぞれ800組の夫婦を対象に面接法による質問紙調査が行われた。
- 3) 中国における解放前の結婚は、配偶者の選択から婚礼に至るまでの手続きを双方の両親同士で行い、結婚の当事者である子どもは一切関与しない「父母包弁婚」と呼ばれる形式が主流であった。
- 4) 「半辺天」は、解放後勝ちとられてきた女性の地位を表した「女は天の半分を支える」という有名な言葉である。
- 5) ここでは、主角、主婦、主宰に対する訳語として、主役、主婦、主人を当てた。

原注

- (1) 「海」は海外に親族関係を持つ家系、「陸」は名誉回復された家系、「空」は政府に返還された住宅を持つ家系を、老九は知識人を意味する。文革期に「唯成分論」を推し進め、海外に親族のあるものは「特務」「間諜」と疑われ、資産を持つ資本家らは下放の列へと追いやられ、知識分子は臭い「老九」と貶められた。
- (2) 以下を参照。卢漢龍「来自個体的社会報告－上海市民生活質量分析」『社会学研究』1990年第1期，P83。章黎明主編『上海婦女社会地位調査』P163,中国婦女出版社,1994。12。沈崇麟主編『当代中国都市家庭研究』P131,中国社会科学出版社,1995.8。
- (3) 沈崇麟主編『当代中国都市家庭研究』P350参照。
- (4) 徐安琪「中外婦女家庭地位比較」『社会』1992年第1期、章黎明主編『上海婦女社会地位調査』、沈崇麟主編『当代中国都市家庭研究』参照。
- (5) 章黎明主編『上海女性の社会的地位に関する調査』P143参照。
- (6) 上海市統計局提供の統計年報中の数値に基づき算出した。
- (7) 同上
- (8) 『Demographic Year book』1993年、日本厚生省人口問題研究所編『1996年人口の動向』東京、1996年参照。
- (9) 『中国統計年監』中の関連数字を用いて計算した。中国統計出版社、1996年。
- (10) 同上